
機動戦士ガンダム0083—もう一つの星の屑—

大根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム0083―もう一つの星の屑―

【Nコード】

N4459Y

【作者名】

大根

【あらすじ】

連邦軍の落ちこぼれ兵士ランドは、ガンダム試作二号機の奪取に、偶然にも居合わせてしまったことで、宇宙世紀の闇に消された。

『デラーズフリート』

の反乱に、巻き込まれていくことになる。

トリントン基地強襲直前（前書き）

エーッと、新作で、偉そうなタイトルを着けていますが、内容は屑です。

風邪を引きながら書いたのでかなり間違いが有ると思いますので、良ければ、ご指摘、アドバイスをして頂ければありがたいですm（

）m

トリントン基地強襲直前

〈第一部〉

雄大に広がるオーストラリア大陸

しかし、その雄大さには、会わない物がその大地のあちらこちらに突き刺さっている。

モビルスーツは愚か、戦艦よりも巨大な破片。

一年戦争において、ジオン公国が行った、コロニー落とし。

『ブリティッシュ作戦』の傷痕である。

かつてコロニーが落ち、オーストラリアの首都、シドニーが丸々消え去った場所。

直径100kmにも及ぶ、最大の人口のクレーター

かつての面影を全く残していないそこで、幾つかの影が破片の周りを飛び交っている。

??? 1「あ、当たってくれ!」

気弱な声と共に、ザクからマシンガンが発射される。

目的は、前方のジムタイプだ。

しかし、ジムタイプは、空に飛び上がり、降下しながらマシンガンを撃ってくる。

??? 1「う、上から!」

立体的なその動きについていけず、マシンガンがザクに当たる。しかし、ザクは被弾もせず、ピンク色のペイントが着くだけだ。

実戦なら、確実に撃破されているであろう。

??? 2 「おいおい。新兵さんは士官学校でお勉強をしなかったのか???」

ふざけたように言う低い声が響き、ジムタイプは攻撃をやめる。

??? 1 「クッソー！まだ勝負は着いてませんよ！」

ザクは、マシンガンを構え、ジムタイプに突っ込んで行く。

??? 1 「48・・・49・・・50・・・終わったあああゝ！」

そう言いながら、腕立てを終えた若い男は、地面に突っ伏す。

??? 2 「ランド。もうへばってんのか？」

そこに、低い親父声が響く。

ランド「カレント隊長！だ、大丈夫ですよ」

カレントと呼ばれた中年の男性は、やれやれと言いながら、去っていった。

ランド「クッソー！後少しだったのに！」

模擬戦でカレントに負けたランドは、罰として、腕立てをさせられ

たのだ。

「???? 3 「ランド。お前また隊長に負けたんだろ!? ざまあねえな。」

男は笑いながら、未だ地面に突っ伏しているランドを嘲笑う。

ランド「アストン! う、うるさい! お前だって隊長に勝ったことな・・・あるか・・・」

ランドは、強いいかけたが、直ぐに言葉を濁してしまう。

アストン「俺様はエリートだからな! 落ちこぼれランドよお」

徹底的に罵倒してくるアストン

ランド「ぐぬぬぬ・・・何も・・・言えない・・・」

事実を言われランドはさらに塞ぎ込んでしまう。

アストン「じゃあなあゝ! 落ちこぼれ醜男ランドゝ。俺はこれからこれなんだよ?」

アストンは、小指を立てながらゆっくりと去っていった。

ランド「くそう・・・好き勝手言いやがって!!」

2人の因縁は、士官学校時代まで遡る。

アストンは、代々軍人の家系に生まれた。

さらさらの金髪に甘いマスク、モビルスーツの操縦も一級品で、性格意外はパーフェクトといってもよい男だった。

士官学校を首席で卒業。

将来を約束されたエリートだった。

それに引き替えランドは、普通の家に生まれた次男坊。

黒い髪も適当に耳の辺りまで、切っただけ。

元気はあり、モビルスーツの操縦もそれなりに出来るのだが、いざと言う時何も出来ない。

要するにヘタレだ。

顔はそれなりにイケメンで優しい性格をしているが、お洒落等には興味が無く。女性に全くモテない灰色の人生を送っていた。

士官学校を落第すれすれで卒業した、『落ちこぼれ』である。

この2人は、オーストラリア、トリントン基地でテストパイロットとなる。

エリートと落ちこぼれ。両極端な2人が会うはずが無く、アストンは、何かとランドを見下しては鬱憤をはらしていた。

以上が、ランドとアストンの因縁の経緯である。

ランド「・・・帰るか・・・」

ランドは落ち込みながら、宿舎へと向かうのだった。

??? 3「見ろよキース。ペガサス級だぜ!」

キース「コウ。言われなくてもわかってるよ。」

すると。途端に辺りが騒がしくなり、光が遮られる。

ランド「な、なんだ！」

ランドはあわてて振り向き、言葉を失った。

空には、巨大な戦艦が浮かび、いままさに降りて来るところであった。

ランド「嘘だろ・・・ペ、ペガサス級！」

かつて、連邦の白い悪魔を載せていた艦と、同じ系列の艦が、ランドの前に降り立ったのだ。

コウ「おい、キース！見に行ってみようぜ！」

キース「マジかよ！？・・・わかったよ！」

コウと呼ばれている黒髪の青年と、キースと呼ばれているメガネの青年が、降り立って来た戦艦に行こうとして、ジープに乗る。

ランド「あ、待ってくれ。おれも載せてってもらえないか？」

ランドも居ても立ってもいられず、2人に話しかける。

コウ「別にいいぜ」

キース「お前も物好きだなあ」

ランド「サンキュ・・・よし、いいぞ。」

ランドはジープに乗り込む。

コウ「よし、じゃあ行くぞ」

コウは、3人を載せた。ジープを戦艦に向かって走らせた。

トリントン基地強襲直前（後書き）

相変わらずの駄文ですいませんm（　　）m
前作でご指摘を頂きましたが、作者の技量不足により、全く進歩していません。

ランドは、アルビオン隊に入れるつもりなので、強引にコウやキースと絡みを入れていますがそこは許してくださいm（　　）m
アストンは・・・どうでしょうか？

勢いで書いてしまいましたので（・・・）

何かよいアイディアがあれば、よろしくお願いしますm（　　）m

ガンダム強奪(前書き)

更新遅れてすいません m (m
達の悪い風邪でした？

相変わらずの駄文ですが、良ければ、コメントお願いします m (m

ガンダム強奪

ガタガタと音をたてながらジープがペガサス級に乗り上げる。

コウ&キース&ランド「・・・・・・・・」

3人は言葉を失った。

目の前には、伝説とまで言われた、ガンダムタイプのモビルスーツがたっていたからだ。

コウが一番に口を開いた

コウ「やっぱりガンダムだ・・・」

キース「あ・・・お、おいコウ！見ろよ！」

そう言ってキースが右の方を指差す。

コウ「ガンダムが2機も！！」

そう言って2人はジープを降りて、ガンダムに近づく。

コウ「こっちはコアファイター付きだ。あっちのも凄いな。見ろよあの重装甲」

キース「見れば解るよ」

ランド「・・・・・・・・」

ランドは呆然としながら、それを見ているしか無かった。

すると、キースがメカニックらしき女性に声を掛け、言い寄っている。

コウは相変わらず、ガンダムにご執心だ。

ランド「（キースって言ったっけ・・・手が速いなあ・・・デカっ！なんだあの人！大の男よりデカイぞ）」

キースが大きい女性に絡まれている。キースと並んで、頭一つ文以上大きいだろう。

ランド「（あ、負けた。キースなんか凹んでる）」

どうやらキースは惨敗したようだ。

ランド「なんか和むな」

人の不幸は蜜の味、というやつだ。

キース「コウ・・・帰るぞ」

コウ「待てよ。もうちょっと見てようぜ！」

キース「俺はご傷心なんだよ。」

2人がジープに向かって来る。

ランド「んっ？、ジムタイプか？」

2機のガンダムの向こうに、1機のジムタイプが見える。

ランド「（デカイバックパックだな・・・）」

一見パワードジムに見えるが、何かが違う。

ランド「（何なんだ、あの機体？どこか・・・）」

キース「コウ、帰るぞ」

コウ「わかったよ・・・そう言えば君は・・・ランド・・・で、合
ってるっけ？」

コウがランドに向かって聞いてくる。

ランド「ああ、あってるよ。ランド・シュバイツ。階級は准尉だ。
お前らはコウとキースだっけ？」

一応3人とも、同期なので、名前は知っているようだ。

コウ「ああ、俺はコウ・ウラキ。階級は少尉。呼び方はコウでいい
ぜ」

キース「俺の名前はチャック・キース。同じく少尉だ。キースって
呼んでくれ」

同期だが、あまり面識は無かったようだ。

ランド「ああ、改めてよろしくな。取り敢えず、夕飯に行くか？親
睦を深めるのも大事だしな。」

辺りはそろそろ暗くなって来た。

コウ「そうだな。同期同士仲良くしようぜ。」

キース「腹も減ったしなあ。行くか」

そう言って、3人は夕飯へと向かうのだった。

コウ「人参要らないよ・・・うえっ」

コウが食事をとろうとする。人参はたくさん入れられたようだ。

ランド「子供かよ！」

ランドは思わず突っ込んでしまった。

キース「げっ！」

キースが何か行っただので、そっちを見ると、キースがあしらわれたメカニックの女性と、大きなメカニックがいた。

ランド「（確か、モーラ・バシット中尉と、ニナさんって言ったっけ）」

すると、コウがいきなり話しはじめた。

コウ「そうだ。ガンダムの反応速度は0・5、ぐらい早く・・・」

コウは何かぶつぶつと話している。

ランド「（ニナさんって、美人なんだけどなにかなく、コウも、何でそんな話しかないんだよ。）」

コウ「・・・それで、あの重装甲の奴は、対核兵器用で、肩のバズーカは戦術核装備だろ？」

ニナ「えっ！」

ニナは相当驚いている。

いきなり、見破られたからだろう。

ランド「核だって!？」

ランドも驚いている。

核兵器使用は南極条約で禁止されているのだ。

ランド「本当なのかよ・・・あ、そう言えば、あのジムタイプは何なんだ？ パワードジムとは何か違うし・・・」

モーラ「あれは、パワードジム改。パワードジムのバックパックをより、高性能のに変えて、装甲の一部をルナチタニウム製にした物。ガンダムにより近いデータをとるために、改良したのをジャブローから持ってきたのさ」

そうモーラは説明をしてくれる。

ランド「へえ、なんか凄いな。」

モーラ「確かにね。手間のかけ方が半端じゃないね。ニナ、いこうか。」

そう言って、ニナとモーラはどこかへ行ってしまった。

ランド「ジャブローも随分金つかってんだな。」

キース「確かに、あんなに手間かけるなんてな。けど俺たちには関係ないさ。」

コウ「まあな。新型は多分、バニング大尉かアレン中尉が乗るんだろ？」

ランド「あの2人が基地の1番と2番だからなあ。まあ良いや。さっさと食おうぜ」

3人は取り敢えず、夕飯を食べる事にしたのだった。

コウ「なあ。もう一回ガンダムを見に行こうぜ。」

夕飯の後片付けをすませると、コウがそんなことを言ってきた。

ランド「またかよ。まあいいけど」

キース「俺は勘弁しときたいんだけどな・・・わかったよ」

3人は再び、ペガサス級へと向かった。

その頃、基地に一台の車が入ってきた。

これが、未曾有の大惨事の始まりになるとは誰も、思いもしないのだった。

キース「あれ、なんかやってるみたいだな？」

重装甲のガンダムに、メカニック達が、何か作業をしているようだ。

ニナ「あなたたち！ここは立ち入り禁止のはずよ！」

3人はニナにばれて案の定怒られてしまった。

コウ「もしかして今、弾頭装備中なのかい？」

コウが大声で、ニナに訪ねる。

ニナ「ええそうよ。だから邪魔にならないように、出てって頂戴！
！」

そういつて、ニナは作業に戻ってしまふ

キース「彼女、あのトゲトゲがなけりゃ最高なんだけどな」

ランド「激しく同意」

コウ「もう諦めろよキース。嫌われてるぜ。ハッキリ言って」

キース「わかってるよ〜んなこた。帰ろ〜帰ってやけ酒付き合えよな！」

コウ「までよ。もう少し良いだろ」

キース「だ〜めだ。」

ランド「（不味い・・・）じゃあ、また明日。」

何かを感じ取ったランドは早々に逃げようとする。

キース「まで〜にげるな。お前も来るんだよ〜。同期だろ」

コウ「わかったよ。ランド、お前も道連れだ。行くぞ」

しかし、あっけなく捕まってしまう。

ランド「うえ〜、わーったよ」

こうして2人は、キースのやけ酒に付き合う事になった。

コウ「あっ！」

前方から、上官らしき士官が歩いてくる。

ザッ

と3人とも敬礼をする。
すると、向こうも敬礼で返してくる。

ランド「（見たことない人だな？ペガサス級の人か？）」

???「素晴らしい。見事なモビルスーツだ」

コウ「自分もそう思います」

コウは生真面目に、そう答える。

???「君？バズーカに弾頭の装備はすんでいるのかね？」

コウ「は、はい？」

???「では、試してみるか・・・」

そう答えると、士官は、ガンダムタイプのコックピットへと登って言った。

ランド「???」

しかし、もう遅かった。

ニナ「まったくあの3人今度はまた何かやり始めたわ・・・あなっ
！はあっ！」

振り向いたニナは、驚愕した。

ガンダムタイプのハッチが開き、士官が中に入ろうとしていたのだ。

ニナ「何してるの！！ハッチを閉めて降りなさい！！」

すると、士官は振り向いて

???? 「フッ」

と言って、ガンダムタイプに乗り込んだ。

ニナ「誰よあれ！！」

ニナは、いてもたってもいられず、ガンダムタイプのところへと向かった。

コウ「なんだ？」

キース「どうした？」

ランド「こりゃやばいって！」

すると、2号機は、ケーブルを千切り、動き出した。

ニナ「誰かつ！誰か2号機を止めて！！」キース「なんだ？なんだ？」

ランド「嘘だろ！こんなの」

コウ「くっ！」

キース「お、おいコウ！」

すると、コウはもう一機のガンダムに向けて走り出した。
そして、ガンダム1号機のハッチをあける。

モーラ「ウラキ少尉！他の人を呼ぶわ。あなたじゃ！！」

コウ「僕だってパイロットだ！」

モーラ「今救弾中よ。すぐには出せないわ。」

コウ「急いでください」

ニナ「2号機のパイロット。聞こえてるでしょ？今すぐに降りれば、罪は軽いわ！今すぐに降りなさい！」

???「この機体と核弾頭は頂いていく。ジオン再興のために！」

このモビルスーツデッキにいた全員が驚愕した。

ニナ「っ！？」

コウ「ジオンだと！？」

2号機は、ビーム・サーベルを使い、ペガサス級のハッチを切り裂き、飛び出した。

キース「嘘だろ！俺は大尉のところに行ってくる。ランド！行くぞ！」

ランド「キース・・・先にいってくれ・・・俺はこいつで出る」

ランドはそういつて、パワード・ジム改を見上げた。

キース「えっ！わかったよ。わかりましたよ。俺1人で行くよ」

そういつて、キースはジープで飛び出した。

すると、1号機も歩き、ハッチを飛び出す。

ランド「こいつは動きますか！？」

モーラ「貴方まで！？・・・救弾はすぐ済むわ！」

ランド「わかりました」

ヒュルルルルルルル・・・

・・・

・・・

チュドドドドドドドドド

チュドドドドドドドドド

チュドドドドドドドドド

キース「今さらジオンが何しようってんだよぉー！」

基地一面に、ミサイルが降り注ぐ。当たり一面は、とても、終戦しているとは思えない惨状だ。

連邦兵士「カークス、キース急げ！」

バニング「模擬戦じゃないぞ！みんな気を引き締めて行け！」

キース「大尉！ジオンが核弾頭装備の2号機を奪って行きました！」

カークス「ジオンだと！あいつらまた戦争をやる気なのか！何人殺せば気が済むんだよ！」

バニング「いそぐぞ！」

そういつてパイロット達はモビルスーツに乗り込む。

ガシヨン

パワード・ジムが格納庫から飛び出す。

すると、そこへ、バズーカが飛んでくる

アレン「!?!」

パワード・ジムは、間一髪で避ける！

後続のカークスのザクがマシンガンを構える。

カークス「うわあああああー」

マシンガンをめっちゃくちゃにうち始める。

ドムが迫って来ていたからだ。

しかし、手練れのパイロットにそんなものが通じるわけもなく、胴体を一閃され、地面に倒れる。

キース「あ、あ、あ」

キースは実際の戦場を目の当たりに、震えていた。

??? 「ゲイリーか！ 作戦成功だ脱出する」

コウ「ここから出すわけにはいかない！」

すると1号機は、ビーム・サーベルを構え、2号機の前に立ちふさがった。

連邦管制官「基地北東より、別部隊確認、残った部隊は至急、指令部の防衛に当たられたし」

モーラ「増援！ そんな馬鹿な！」

基地の北東にみすみす侵入を許してしまったのだ。

ランド「コウ・・・2号機を頼む・・・俺は、指令部の防衛に出ます！」

そして、パワード・ジム改は、トリントンの激戦の中へと飛び出した。

ガンダム強奪（後書き）

えーっと・・・原作のままです？

このあとはランドの戦闘なので、ちょっと展開を買えます。

強襲部隊の別動隊が登場させたり、キンバライトには、まだまださ
んのモビルスーツがある。などです。

あと、カークスは生きてるかもしれないやられ方にしたつもりなの
で、何か意見あれば、お願いしますm（　）m

今、葉を飲んだので（睡眠導入剤）頭がおかしくなってます。

批判などはどうぞ自由をお願いしますm（　）m

その文だけ、自分の力になりますのでm（　）m

トリントン基地攻防戦（前書き）

エーッと・・・更新遅れてすみません m (m

テストと、たちの悪い風邪にかかってまして？

それと、前回の後書きで暴走してしまいすみませんでした m (

m
カークスは、本来死んでますが、出そうと・・・思っています。

長かったのに、内容スカスカの駄文ですが、良ければお願いします
m (m

トリントン基地攻防戦

2体のガンダムは、互いに動かず、にらみあっていた。

??? 「ふっ・・・こしやくな真似を・・・邪魔をするな！」

ガンダム2号機は、先にビーム・サーベルを構え、ガンダム1号機に向かって、上段切りをする。

ガンダム1号機もなんとかビーム・サーベルを出し、受け止める。

コウ「えっ？うわあああー」

しかし、ガンダム1号機は受けきれず、弾き飛ばされてしまう。

コウが応戦しようとモニターを見るが、既にガンダム2号機は視界にはいない。

コウ「ど、どこだ？」

すると、後ろから、ガンダム2号機がやって来て、ガンダム1号機をけりあげる。

戦いは、圧倒的だった。

連邦パイロット1「堕ちやがれ！」

ジム改が、前方から迫るドムタイプに向かってマシンガンを発射する。

ドムタイプは、左右によけながら、バズーカを発射してくる。

ジム改も横に避ける。

ドムタイプはジム改のよけた先に、バズーカを撃つ

連邦パイロット1「う、うそだあああー！」

ジム改は、反応仕切れず、連邦パイロットの絶叫と共に、バズーカの直撃を受け、爆発する。

ドムタイプはバズーカのリロードをしながら、物陰に隠れ次の敵に備える。

すると、そこに、ランドのパワード・ジム改が降りてくる。

ランド「よし・・・訓練通りやれば」

パワード・ジム改が降りた隙を狙って、ドムタイプはバズーカを発射する。

ランド「敵!？」

接近するバズーカに気づいたランドは、パワード・ジム改を飛び上がらせ、マシンガンの銃口をバズーカが飛んできた方向に向ける。

ランド「お、墜ちてくれえええー！」

半狂乱になりながら、マシンガンをドムタイプに向けて撃ちまくる。

ドムタイプは、建物の影に隠れ、それをやり過ごす。

ランド「ど、どこなんだよ・・・」

いつ襲って来るかわからない敵に、ランドはびくついてしまう。

すると、しびれを切らしたかのように、ドムタイプがサーベルを構えて、飛び出して来た。

ランド「うわあっ！くるなあっ！」

ランドはあわててマシンガンを撃ちまくる。

しかし、まともに狙っていないそれは、かすりもしない。

ドムタイプは好機とばかりに、サーベルを構え接近してくる。

ランドは当たらないマシンガンを撃ちまくる。

ランド「い、嫌だ・・・死にたくない・・・死にたくないよ」

ランドは泣きそうになりながら、機体を動かすのをやめてしまう。

ランドの頭の中では走馬灯の様に今までの思い出が浮かんできていた

そのなかでとある記憶を思い出すランド

ランド「（これって・・・あの時の・・・）」

それはランドが連邦軍に入るきっかけになったある記憶だった。

ランド「・・・死ねない・・・」

ランドはポツリと呟く。

そして、サーベルが胴体に迫る瞬間だった。

ランド「こんなことで、

死ねるかよおおおー！」

ランドは叫びながら、パワード・ジム改を左に、緊急回避させる。

ドムタイプは、振りかぶったサーベルをかわされたことにより、バランスを崩す。

ランド「貰ったあああー！」

マシンガンを投げ捨て、パワード・ジム改は右手にビーム・サーベルを抜く。

そして、振り向いたドムタイプに向かって、頭から一直線にビーム・サーベルを降り下ろした。

ドムタイプは、何の抵抗も出来ずに、真っ二つにされ、爆発する。

ランド「はあっ。はあっ・・・や、やれたのか!？」

ランドは荒い息をしながら、その場に立ち尽くしていた。

すると、近くにいたジム改から、通信が入る。

連邦パイロット2「その機体。空いているなら、指令部の防衛に

来てくれ。、ドムタイプが数機接近しているらしい！」

ランド「わ、わかりました」

未だ混乱しているランドは、とりあえず指令部へと向かうのだった。

連邦パイロット3「くそ！すばしっこいんだよ！」

辺りをホバーで滑りまくるドムタイプに連邦のモビルスーツ隊は苦戦していた。

連邦パイロット3「弾切れ！？ヤバい。早く・・・う、うわあああああああー！！」

リロード中を狙われ、ジム改はバズーカの直撃を受け、撃破される。

連邦パイロット4「くそっ！なんなんだよこいつらあ！」

別のジム改がすかさずバズーカを撃つがドムタイプは軽くかわす。

連邦パイロット4「ちくしょうっ！来るなあ！」

ジム改は、続けてバズーカを撃つが、ドムタイプは、軽くかわし接近してくる。

ドムタイプはサーベルを抜き、構える。

連邦パイロット4「くそおおおー!!」

連邦パイロットが叫び、ドムタイプが振りかぶった瞬間だった。

???「うわあああああああー!!」

ズドドドドド

空から、弾が降り注いだ。

ドムタイプは、避けるまもなく、蜂の巣にされ、ズシンと重い音をさせ倒れる。

連邦パイロット4「な、何が!？」

連邦パイロットが驚いていると、1機のジムタイプが降りて来た。

連邦パイロット4「た、助かった・・・感謝する」

ランド「い、いえっ! ランド・シュバイツ准尉! 援護に参りました。」

連邦パイロット4「ああ、敵はいまだに基地に侵入してきている。かなりの数だ。ガンダムの奪還も大事だが、基」

連邦パイロットが言い終わる前に、バズーカの弾頭が飛んでくる。

連邦パイロット4「ちっ! とにかく迎撃するぞ!」

ランド「り、了解です!」

ランドは荒い息をしながら、敵を探す。

ランド「(頼む・・・来ないでくれ!)」

しかし、無情にも敵はやってくる。ドムタイプが3機だ。

ランド「うわあっ! 何で来るんだよ・・・そんなに無駄死にしたいのかよおおおー」

ランドは狂ったようにマシンガンを撃ちまくる!

ランド「当たれ・・・当たれ・・・当たってくれえええー」

偶然にも、マシンガンがドムタイプの足に当たり、ドムタイプはバランスを崩し倒れる。

相当なスピードだったのか、そのまま滑り、辺りの建物に突っ込み、爆発する。

ランド「やれたっ! つ、次だ!」

連邦パイロット4「ようし、全機撃ちまくれ!」

号令と共に、指令部周辺にいた3機のジム改が1機のドムタイプに向けてマシンガンを撃ち始める。

3方向からの攻撃で、ドムタイプは蜂の巣にされ爆発する。

連邦パイロット5「やった・・・っ!」

しかし、喜ぶ暇もなく、接近したドムタイプに撃破されてゆく。

連邦パイロット6「誰か・・・誰かたすけっ!・・・」

悲鳴と共に、3機のジム改は撃破される。

ランド「くそおっ!ここまでなのか!」

???「はっ!墜ちな!」

渋い声と共に、ドムタイプのよこからマシンガンの弾が飛んでくる。

ドムタイプは、いきなりの攻撃で反撃出来ず、撃破される。

カレント「これで全部か・・・こちらカレント。無事か?」

ランド「た、隊長!」

カレント「んっ?ランドじゃねえか?何でそんな機体に・・・」

ランド「あっ・・・いろいろありまして・・・」

すると、もう1機ジム改が接近してきた。

???「おいおい。落ちこぼれランドじゃねえか。なんだ、生きてたのかよ。」

ジム改から、見下すような声が聞こえてくる。

ランド「その声・・・アストンか!?」

アストン「ああ、エリートのアストン様さ。俺は既に2機のゴミど

もを撃破してるんだぜ。」

ランド「はんっ、威張りやがって！」

アストン「うるせえ！落ちこぼれはさっさと帰りな！邪魔なんだよ！」

2人が口論をしていると、見かねたカレントが仲介に入って来た。

カレント「てめえらしい加減にしがれ！戦闘中なんだぞ！」

ランド「わ、わかりました。すいません・・・」

アストン「ちっ、了解」

カレント「よし、敵はおそらく逃げ帰ったんだ。情報が入り次第、ガンダム2号機を追うぞ！」

ランド「了解です」

すると急に、

ヒュルルルルルル

と言う音がなり・・・・・・・・・・指令部が派手な爆発により吹き飛んだ。

ランド「なっ！」

指令部の瓦礫が降ってくる。

カレント「ちっ！逃げろ！」

全機は、いそいで、指令部から離れる。

瓦礫が降って来るものも、何とか全機無事だった。

ランド「な、なんなんだよ！これ！？」

ランドの目の前には、完全に崩れた指令部がある。

カレント「重モビルスーツか・・・派手にやってくれるな。」

ランド「ちくしょう・・・指令部が」

アストン「全く、派手にやってくれるよなあ」

ランド「なんだよその態度は！？人が沢山・・・沢山死んだんだぞ
！？」

アストン「でっ？」

ランド「お前なあっ！」

ランドは激しい怒りを露にしている。

カレント「ちっ、落ち着け。アストンがどう思おうがどうでもいい。
いいな？」

ランド「くっ・・・わかりました。」

ランドは渋々納得する。

アストン「了解・・・ま、そう言う事だ。さっさと追いましょうぜ。」

カレント「ああ。だが、情報がなあ」

すると、通信が入ってくる。

オペレーター「バニング小隊が、ジオンの輸送機を撃破。敵は海岸沿いです。カレント小隊は至急向かってください。」

カレント「わかった。カレント小隊。行くぞ」

アストン「了解」

ランド「了解です（バニング小隊って・・・コウ達か？無事で居てくれ。ただ・・・それよりも、アストンは何か・・・）」

ランドは、アストンのジム改を睨みながら、出発するのだった。

「????」

1人の男が、もう1人に何か報告をしている

「???」「予定通り、奴らが動き出しました。閣下」

??? 「うむ。我々の理想のため、そして地球圏の未来・・・のた
めにな」

そういった男の顔は薄い笑いを浮かべていた。

トリントン基地攻防戦（後書き）

相変わらず駄文ですいませんm（　）m

これから、テストがありますので、更新遅れますm（　）m

あと、モノアイガンダムズから、すこしパクリます。

といっても、変わらず駄文からは変わりませんが・・・

あと、主人公の機体がジムタイプばかりなのは・・・自分がジム
＆＆＆＆＆ガンダムだからです？

もし良ければ、これからも生暖かい目をお願いしますm（　）m

霧の中の攻防（前書き）

更新遅れてすいません＞（――；）＜

補習をかけたテストの最中でして？

短いですが、とりあえず更新だけしようと思ひまして？

霧の中の攻防

ガシヨン・・・ガシヨン・・・

4機のモビルスーツが、霧に包まれた海岸線を進む。視界は悪く、目の前を歩くジム改がわずかに見える程度だ。

ランド「な、何も見えませんね・・・」

カレント「ああ、この霧じゃあなあ」

カレントは、露骨に機嫌を悪くしながら言った。

カレント「バニングの奴がへまさえしなけりゃな」

事を知っているランドは、さりげなくフォローを入れる。

ランド「今さら愚痴ったってしょうがないですよ」

アストン「実際そうじゃねえか。ま、新米少尉どのじゃ、ガンダムを乗りこなせる訳ねえか」

アストンが、火に油を注ぐような事をいってしまう。

ランド「アストン！お前なら、2号機を止められたのかよ？」

アストン「ああ、余裕でな。主席の俺にかかりゃあ、ちゃっちゃと片付いてるよ」

アストンは、何かと仕官学校の時の話を持ち出し自慢をしてくる。

ランド「うるさい！これは実戦なんだ。模擬戦とは違うんだよ！」

アストン「はん。俺は将来連邦のトップに立つんだ。実戦なんか余裕」

ランド「お前！」

カレント「黙りやがれ！敵さんがすぐそこまで来てるかも知れねえんだぞ！」

見かねたカレントが仲裁に入ってくる。

ランド「あっ！了解しました」

アストン「はいはい。わかりましたよ（このルールが）」

2人は渋々了承し、辺りの警戒に移る。

視界は、悪く、レーダーまでもが使えない。
ミノフスキー粒子が散布されているのだ。

ランド「どこだ・・・どこにいるんだよ・・・」

ランドは、まだ怯えている。
見えざる敵というものは、誰でも怖い物なのだ。
それが、新兵なら、尚更である。

アストン「・・・・・・・・・・」

さすがのアストンも黙っている。

カレント「提示連絡。こちらカレント。霧は深くなる一方だ。・・・
・・・へっ、バニングのスケベやろうに手柄をわたすかよ!」

カレントがぼやく。

その瞬間だった。

ジュワッ

と、いう音になり、1機のジム改が倒れる。

ランド「て、敵!どこだっ!？」

辺りを見回すが、敵の姿を見えない。

カレント「ランド!!後ろだ!!」

ランド「えっ!うわあっ!!」

ランドはあわてて振り向く。

すぐそこまで、2号機がビーム・サーベルを構え接近してきていた。

ランド「く、くそおっ!」

ランドはビーム・サーベルを構えようとする。

しかし、2号機のタックルによって、手にしたビーム・サーベルを
落としてしまう。

ランド「嘘だろ!!こんなあっ!!」

武器を無くしたパワード・ジム改に2号機は、切りかかる。

カレント「くそやろうが!!」

カレントのジム改が、2号機にタックルを仕掛ける。

のけ反った2号機は、一旦下がり、ビーム・サーベルを構え直す。

ランド「た、隊長」

カレント「ランド。生きてるか？」

ランド「な、何とか」

ランドは震えながら、それに答える。

カレント「アストン！ランド！援護しろ」

カレントはそういうと、ビーム・サーベルを構え、2号機に迫る。

アストン「はいよ」

ランド「了解！」

パワード・ジム改とジム改はマシンガンを構え、2号機に向かって撃ち始める。

2号機は臆することなく、巨大なシールドでそれを受け止める。

マシンガンごとくでは、傷をつける事すら出来ない。

ランド「なんだよあのシールド!?!」

ランドが、わめいている内にカレントが懷に飛び込む。

カレント「頂いたぜ!!」

ビーム・サーベルを構え、2号機に向かってふりおろす。
誰もが勝利を確信していた。

しかし、2号機は、大型スラスターをジム改に向かって、噴射した。

カレント「なっ!しまっ」

カレントの視界が見えなくなり、一瞬怯んだ時だった。
ビーム・サーベルが一閃し、ジム改の胴体を切り裂く。

ランド「カレント隊長おおー!!」

ランドの絶叫と共に、ジム改は、爆炎をあげながら倒れる。

ランド「う、嘘だろ?隊長が・・・そんな・・・!?!」

ランドが衝撃を受けている間に、2号機はビーム・サーベルを構え
接近してくる。

ランド「く、くそっ!」

何とかビーム・サーベルを出し、それを受け止める。
ジジジジジジ

お互いに、ビーム・サーベルで鏝迫り合いをする。

しかし、出力で劣っているのか、次第に押されていく。

ランド「このままじゃあ・・・」

アストン「援護してやるよ」

いつの間にか2号機の横合いに回り込んでいたアストンが、2号機に向かってマシンガンを発射する。

ランド「今だ！」

2号機が怯んだのを見計らって、ランドはパスワード・ジム改を飛び上がらせた。

しかし、2号機はそれを見逃さず、ビーム・サーベルを振るってくる。

ランド「!?!? ヤバイっ」

あわてて避けようとするも、反応仕切れず、両足を切られてしまう。

バランスを崩したパスワード・ジム改は、そのまま、地面に落ちる。

ランド「うわあぁっ!!・・・う・・・う・・・」

ランドはそのまま意識が遠退いていくのを感じていた。

（? ? ? ?）

「??? 閣下、今のところは、すべて予定範囲内で進んでおります。」

「??? 「・・・順調なようだな・・・これでコーウェンも終わりだ・・・フフフ」

霧の中の攻防（後書き）

相変わらずの駄文ですいません＞（――；）＜

次回は、ネタバレかも知れませんが、コウVSモンシアならぬ、ラ
ンドVSモンシアを書こうと思っています。

テストの最中なんで、また更新遅れます＞（――；）＜

出撃アルビオン（前書き）

コメントいただき、嬉しかったので衝動書きしてしまいました？
資料がなく、うろ覚えの記憶でかいたので、間違いまみれだと思います？

あと、良ければコメントお願いします＞（――；）＜
必ず答えて、少しでも改善していきますので？

出撃アルビオン

ランド「う・・・こ、ここは・・・？」

ランドが目をさますと、眼前にはテントの天上が広がっていた。

キース「お、目さましたか」

ランドは、若干痛む頭を抱えながら、キースに向かって話しかける。

ランド「キース・・・俺は何で・・・あっ！2号機に負けて！2号機はどうなったんだ！？」

すると、キースは途端に表情を曇らせながら、話始めた。

キース「2号機は核弾頭ごと盗まれたよ。俺もコウも、バニング大尉まで何も出来ず負けたんだ」

ランド「！？ば、バニング大尉がか？何て奴だ・・・」

いくら機体性能が違うとはいえ、基地のNO.1が簡単に負けるなどとは思えないのだ。

すると、キースは先ほどよりも、さらに暗く、怯えた表情になった。

キース「だって・・・だってよ・・・」

ランド「お、おい！？何があったんだ！？」

キースの怯えように、ランドも動揺してしまう。

キース「2号機のパイロットは、あの『ガトー』なんだぜ」

ランド「ガトー……うそだろ！ガトーって、まさかソロモンの悪夢『アナベル・ガトー』！？」

ランドは今までにない程の声を張り上げる。

『アナベル・ガトー大尉』

ドズル中将貴下、宇宙攻撃軍所属。

ジオンがソロモンから撤退する際、専用のリックドムを繰り多数の戦艦、モビルスーツを撃破した事により、両軍から、ソロモンの悪夢と恐れられたエースパイロットである。

ア・バオア・クー戦以降の消息は、不明である。

キース「ああ、あのガトーさ。お陰で基地の戦力はズタズタさ……生きてるのが不思議過ぎるぐらいだよ。あのガトーとやりあったってのにな……」

ランド「(2号機のパイロットがガトー！？あんなのと俺は戦ったのか！！俺、いきてるよな！？夢じゃないよな！？)」

ランドはそう思いながら、頬をつねる。

ランド「いてえっ！・・・ゆ、夢じゃない・・・俺は・・・生きてるんだ！！」

キース「お、おい。いきなりどうしたんだよ？気でも狂ったのか？」

ランドの突然の奇行に驚き、キースはそう訪ねる。

ランド「い、いや。大丈夫さ。生きてるのを喜んでるだけさ。」

キース「そうか・・・そうだよな！」

「ハハハハ」と2人で笑い合う。

キース「ん？何か忘れてるような・・・あーっ！早くバニング大尉に知らせないと」

キースは突然立ち上がる。

ランド「な、なんだ？」

キース「コウとモンシア中尉・・・補充兵が戦ってるんだよ！？」

ランド「ぶっ！？な、何で！？」

あまりにも突拍子すぎて、ランドは吹いてしまう。

キース「1号機のパイロットの座をかけてだよ！？本当は大尉探してたんだけど、お前が目を覚ましたから。俺、バニング大尉探してくる」

ランド「あ、ああ、わかった」

そう言って、キースは飛び出して行って、しまった。

ランド「コウだってガトーと戦ったのに、俺は何てさまだ・・・俺だって・・・やれるよな?・・・」

ランドは何かを決意しかけながら、モビルスーツのハンガーへと向かった。

ランド「よし・・・今だ!」

整備兵がいらないのを確認して、パワー・ジム改のコクピットへと走る。

整備兵「お前?・・・何をしてるんだ!??」

ランド「ヤバい!気づかれた!」

ランドは急いで、パワー・ジム改のシートに座ると、機体を起動させる。

ランド「えーっと、・・・て、敵影が見えたんですよ。偵察に行きます!..!」

このセリフが後の問題児と被るとは、ランドは夢にも思わないであ

ろう。

整備兵「おい、待つ」

整備兵が言い終わる前に、パワード・ジム改を動かし、ペイント弾とシールドを掴み、ハンガーを出す。

回りに人がいないのを確認すると、バックパックを吹かせた。

ランド「うぐぐっ！な、何て推力だ！！」

ジム改の比ではない推力に戸惑うランド。

ランド「ま、前はそこまで使わなかったからな・・・模擬戦か、行くとしたら・・・試験場だな」

ランドはパワード・ジム改を、試験場へと向かわせるのだった。

ランドが出ていってすぐに、ハンガーの整備主任がかえってきた。

整備主任「おい、ここにあったジムタイプどうした？」

整備兵「それが・・・偵察にでるって・・・」

整備主任「なんだと？まだ足が直し掛けなんだぞ！ショック・アップソーバーももう替えがないのに・・・壊すなよ・・・」

整備主任はそう祈るしかなかった。

ランド「もうちょっとだ・・・見えた!」

ランドの前方に戦っていると思われる2機のガンダムとジムタイプが、見えた。

ランドは、パワード・ジム改を近くに停めてあるジープのそばにおろした。

ベイト「なんだこりゃ?」

アデル「ジムタイプのカスタム機ですね」

ニナ「パワード・ジム改・・・誰が?」

ランド「今どうなってるんですか?」

足元にいるニナに気付いたランドはそう訪ねる。

ニナ「えっ、ああ、よくわからないのよ。残骸の中にいるから。」

ランド「そうですか・・・」

すると、残骸の壁を突き破りガンダムとジムタイプが飛び出してくる。

モンシア「お、俺がまけたのか?」

コウ「はあっ、はあっ。やれたのか？」

ベイト「モンシア！何やってんだよ！」

ベイトは呆れた顔をしながら、通信機に話しかける。

モンシア「くそっ、くそっ・・・おい、そのモバイルスーツ！！」

ランド「はいっ！？」

モンシア「またガキか！俺がガキに負けるわけが・・・おい、俺と勝負しろ！！」

声から、まだ若いと悟ったのか、モンシアは勝負を吹っ掛けてくる。

ランド「ええっ！？そんな！？」

モンシア「うるせえ」

モンシアは怒りに任せて、マシンガンを撃ってくる。

ランド「避け・・・れるかよ！！」

足元の3人を庇い、シールドでペイント弾をうける。

ベイト「モンシアあ！あぶねえだろ！」

モンシア「うるせえんだよおおおー！！」

モンシアはさらにマシンガンを乱射してくる。

ランド「・・・しろ」

モンシア「ああっ？」

ランド「いい加減にしろつつつてんだよおおおー！！」

何かのスイッチが入ったのか、ランドは絶叫しながら、パスワード・ジム改をジムタイプに突っ込ませる。

モンシア「何いい！早い！」

思いもよらず、高機動なパスワード・ジム改にモンシアは驚きを隠せない。

モンシア「だがな、単純なんだよ。新米ごときにやられるか！」

ジムタイプはパスワード・ジム改の攻撃を横に軽く受け流す。

ランド「うわっ！」

体勢を崩したパスワード・ジム改にジムタイプは好奇とばかりにマシンガンを撃ちまくってくる。

ランド「しまった。マシンガンが！？」

マシンガンにペイント弾があたり、パスワード・ジム改は、マシンガンを落としてしまう。

モンシア「バカが。おらおらあ！！」

ジムタイプは、攻撃の手を緩めず、接近してくる。

シールドでうけることしかできないパワー・ジム改は、次第に追いつまれて行く。

ランド「・・・俺は・・・また・・・」

ランドは敗北を覚悟し、うつむく。

モンシア「新米が！情けねえなあ？何で軍人になったんだよ！」

ランド「くそっ、くそっ。くっそおおおー」

やけくそになりながら、パワー・ジム改を飛び上がらせる。

モンシア「なっ！？」

ジムタイプもあわててマシンガン撃つが、パワー・ジム改の推力についていけない。

ランド「うわあああー！！」

ランドは絶叫しながら、パワー・ジム改を・・・・・・・・・・ジムタイプに足から落とした。

モンシア「何iiiiiiii！うおわっ！」

高高度からの落下の衝撃はすさまじく、ジムタイプの胴体がひしゃげる程だ。

ランド「今だ!？」

隙ができたジムタイプのマシンガンを奪い取り、ジムタイプに突き付けた。

モンシア「いててっ!・・・何っ!また俺がまけたのかぁ!？」

モンシアは愕然とし、ジムタイプのレバーから手を離した。

ランド「はあっ、はあっ、や、やれた・・・のか?・・・あ・・・あ・・・」

ランドはもはやまともに喋ることすら出来なくなっていた。
本気の戦闘の恐怖に怯えきってしまったからだ。

あたり一面が、静寂に包まれる。

バニング「お前ら!何をしている」

その静寂を打ち砕くかの様に、バニングの怒号が響く。

コウ「た、大尉!」

バニング「全く・・・おい、お前らは基地に戻れ!後の事は俺に任せろ!

全員「はい・・・」

そうして、全員は基地へと戻るのであった。

ハリダ「一週間の独房入りだよ。いいね？」

コウ「はい」

コウはそう言って、独房にはいる。

キース「コウ・・・」

キースが心配そうにコウをみる。

ハリダ「そうだ。君は、追撃部隊に志願するのかい？」

ハリダは、ランドに対して、聞いてくる。

ランド「俺は・・・志願します。独房にも入ります。」

ランドは真剣な顔をして答えた。

ハリダ「わかった。手続き等の書類は後で持ってくるよ。同じく一週間だよ。」

ハリダは淡々と告げた。

ランド「はい。」

そう言って、ランドも独房へとはいる。

ランド「（俺にだって・・・やれる事があるはずだ・・・）」

ランドはそう思いながら、ベッドへと寝転ぶのだった。

この日、強襲揚陸艦アルビオンは、アフリカへと出発した。

出撃アルビオン（後書き）

駄文度8割増しですいません>（――；）<
次回は、アフリカでのジオン残党との戦い・・・の予定です。
本当は10機しか敵機はいませんが、少し増やします。
テストと補習があるので、かなり更新遅れます>（――；）<

遭遇（前書き）

更新遅れてすいません＞（――；）＜
結局補修になってしまいました？

かなり急いで書いたので、いい加減になってるかも知れないです。
ご指摘、感想あれば遠慮なくください・・・むしろ、遠慮なんか捨てて、何でもいのでコメントお願いします？
かならず返信いたしますので＞（――；）＜

遭遇

アルビオンがアフリカを目指して、早一週間。

未だに、何も進展がないまま、時は過ぎ去っていくのであった。

ランド「・・・今日も進展無し、と」

ランドが夕食を食べながら、そう呟く。

アストン「たくよ。いつになったらみつかんだよ!」

アストンもそれに答える。

ランド「まあまあ、落ち着けよ。」

ランドがそれをたしなめる。

アストン「うるせえ!こんなことなら、志願すんじゃないかったよ!」

アストンは机を叩くと、そのまま食堂を出ていってしまふ。

ランド「(じゃあなんで志願したんだよ・・・)」

ランドは心の中でそう思う。

実際、アストンが追撃部隊に志願したのは驚きであった。

エリートの家計で、高い操縦技術を持つアストンなら、志願などしなくても良いはずなのだ。

ランド「(まっ、エリートさんは何を考えてるか解らないしな・・・)」

特に気にする事もなくランドはそのまま夕食を再開したのだった。

「ハンガー」

損傷したモビルスーツや、改造途中の機体を前に、
モーラが整備員に声を掛ける。

モーラ「パワード・ジム改はF系のパーツを流用して・・・」

そこに偶然やって来たニナが、声を掛ける。

ニナ「モーラ。偵察機なら、さらにスナイパーのスコープも取り付けたら？倉庫からもってきたんでしょ？」

ニナの提案にモーラが飛び付く。

モーラ「そりゃいいね。改造しがいがあるよ！」

モーラが笑顔でそう語るが、整備員の顔は、げんなりとしている。

整備員「主任、これじゃガンダムの為のデータとれませんよ？」

改造しすぎたパワード・ジム改に対して、整備員が口を出す。

モーラ「データもなにも死なれちゃまずいでしょ？ ベースが貧弱なんだから、少しでも強化しないと。」

モーラの最もな提案に整備員も黙る。

モーラ「さあて、今夜は徹夜だよ。いつ敵が来るかわからないんだからね。」

整備員一同「（マジですか・・・）」

ニナ「ほどほどに頑張ってね。あたしもガンダムの整備しなきゃ」

ニナも、自らのガンダムの整備を始める。

こうして夜はふけて行くのであった。

〳〵次の日〳〵

シナプス「ランド准尉。直ちにブリッジへ来てくれたまえ。」

ランド「ふえっ！」

未だ自室で寝ていたランドは、呼び出しの通信で目を覚ます。

ランド「ふあゝ・・・着替えて行くか・・・」

眠たい目を擦りながら、ランドは着替え、ブリッジへと向かうのだった。

ランド「シナプス艦長、何かご用でしょうか？」

そう言って、ブリッジへと入る。

シナプス「うむ。ここから先は、ジオン残党がうろついていると言われている。そのため、偵察を出せねばなんのだ。君は、パワー・ジム改ででくれたまえ。」

ランド「了解です。しかし・・・」

何か分の悪い顔をするランドに対して、シナプスは、悟ったように声を掛ける。

シナプス「朝食の後で構わんよ。すでにウラキ少尉も出ているのである。多少の余裕はある。」

ランド「あ、ありがとうございます、艦長。失礼します。」

ランドは、朝食を取れないという不安をなくし、ホッとしながらブリッジを後にするのだった。

アストン「ランド」。偵察だって？ま、お前にはそれくらいしか出来ねえよなあ。ハッハッハッハ。」

朝食を終え、ハンガーへと向かうランドにアストンが茶々を入れてきた。

ランド「う、うるさい。偵察だって大事なんだよ！」

アストン「はいはい。ま、頑張れや」

アストンは聞く耳持たずといった感じで、立ち去る。

ランド「（アストンの奴！いつか仕返しを・・・無理か・・・）」

早くも諦めながら、ランドはハンガーへと向かうのだった。

（ハンガー）

ランド「おいおい・・・」

ランドはあきれながら、自らが乗る機体を見上げていた。

モーラ「お、ランド。どうだい、この機体は。」

モーラは自信満々にパワー・ジム改を見上げる。

ランド「いや、どうって言われても・・・」

ランドは口を濁す。

それもその筈だ。

パスワード・ジムの頭には、ジム・スナイパー？のスコープがつけられ、胴体にはウェアラブルアーマーがつけられ、足のショックアブソーバーも変わっていたのだ。

ランド「・・・・・・・・・・」

ランドは言葉を失う。

モーラ「まあ。とりあえず乗りな。出撃するんだろ？」

ランド「あ、はい。」

訳もわからぬまま、ランドはパスワード・ジム改に乗りカタパルトに立つ。

モーラ「あ、そうだ。足はホバーだから、操縦気を付けなよ。」

ランド「えっ、ホバーって・・・」

ランドが言い終わるまえに、カタパルトによりパスワード・ジム改は射出された。

ランド「ぐおおお！」

射出されたパスワード・ジム改は、荒野に着地する。

ランド「ふう。ホバーって・・・とりあえず進むか。」

言われた通りホバーのスイッチを入れ、進もうとする。

ランド「うおわっ」

慣れない動きに、転倒してしまう。

モーラ「気を付けなよ。機体を少しまえに、倒すんだ。」

ランド「わ、わかりました。」

モーラの助言に従い、機体を少しまえに、倒す。

ランド「うわっ、早い！」

パワード・ジム改は地面を滑るように進む。

ランド「こりゃすごい！まるでドムだな・・・こちらランド、偵察に向かいます。」

シモン「了解。気をつけて」

通信を終えると、さらに加速し、対にはアルビオンの視界から、消える。

ランド「敵機は無し、と。」

辺りを見渡すと、レーダー類の計器をチェックする。
レーダーにも、機影は確認出来ない。

その時だった。

ピーッ、ピーッ

アラートが鳴り響いた。

ランド「敵！？9時方向から！」

9時方向・・・左から、バズの弾頭が接近してくる。

ランド「こ、こちらランド、敵と遭遇しました。・・・ザク2、ドム2機！ヤバイです！早く援護をっ！！」

シモン「准尉！直ちに増援を送ります！」

ランド「了解！！くそおっ」

シモンとの通信を終えると、敵機に向かって、マシンガンの牽制射を行う。

それを軽くかわした敵機は、マシンガンを連射しながら、接近してくる。

避けながら、シールドで受ける。

ランド「消耗戦になったら負ける！！どうすればいいんだよおっ・・・」

トリントンの時のように、パニックを起こしかけてしまう。

ランド「・・・違う・・・あの時とは違うんだ！覚悟だってしたはずなんだ！」

吹っ切れたランドは、パワー・ジム改を滑らせ、接近してきている敵機に向かわせた。

ランド「うわあああああー！！」

マシンガンを腰に付け、ビーム・サーベルを両手に構える。

そのまま敵機に向かって、突っ込む。

マシンガンが当たるが、ウェラブラルアーマーのお陰で、目立った外傷は見えない。

ランド「これで！！」

接近してきていたザクとドムが、止まり、下がろうとする。

その間に入り、左右のビーム・サーベルで2機の胴体を切り裂き、通り過ぎる。

真っ二つになった2機は、切られた衝撃で地面に倒れ、爆発する。

ランド「い、今なら！当たれっ！」

右手のビーム・サーベルを捨て、マシンガンを構える。

こちらを向こうと、しているザクに向かって、マシンガンを発射する。

ザクは蜂の巣になり、倒れる。

ランド「や、やれ・・・」

ランドが言い終わる前にもう1機のドムが切りかかってくる。

ランド「!?!? くそおっ! あたれえっ!!」

切りかかろうとしているドムに向かって、とにかくマシンガンを超至近距離で打ちまくる。

マシンガンで蜂の巣にされたドムは、サーベルを落とし倒れる。

ランド「はあっ、はあっ、やれた? 4機を相手に? マジか? 俺、生きてるのか?・・・やったああー!!」

ランドは、自問自答の後、とにかく喜んだ。『生きている』これ以上嬉しいことは人にとってない。当然だ。

パワード・ジム改がハンガーに入る。

ランドが降りると、回りにいた人が駆け寄ってくる。

キース「すげえよ! 戦果4だぜ」

コウ「ああ、しかも相手はドムだぜ! あの重モビルスーツを相手にして。」

皆が誉めちぎってくる。

ランド「ま、まあな。」

ランドも満更ではなかった。

シナプス「ランド准尉。直ちにブリッジに来てくれたまえ。」

朝と同じ放送が流れ、ランドは再びブリッジへと向かった。

くブリッジく

シナプス「戦果4。おめでとう。」

シナプスは素直にランドの戦果を誉める。

ランド「あ、ありがとうございます！」

ランドも素直に喜ぶ。

すると、シナプスは顔をしかめながら語りだした。

シナプス「敵は確かにここにいるようだ。一刻も早く2号機を見付けねばならん。君にも、更に偵察、戦闘を強いることになる。」

シナプスは、静かにそう語った。

ランド「・・・わかってます。志願するときには覚悟をしたはずですから・・・」

ランドも静かにそう返答をする。

シナプス「そうか。とりあえず休憩をとりたまえ」

ランド「了解です。失礼します」

シナプスの好意を素直にうけ、ランドはブリッジを出る。

ブリッジを出たところでモンシアが声を掛けてくる。

モンシア「覚悟ってのはそんな簡単に決まるもんじゃないぜ。よく考えるんだな」

いつものいい加減さを全く感じない。しゃべり方をすると、モンシアは立ち去ってしまう。

〳ランドの自室〵

暗くしてある部屋のベッドにはランドが寝そべっている。

ランド「(覚悟は・・・できてるはずだ。じゃなきゃ・・・)」

モンシアの台詞を思い出しながら、釈然としないまま、ランドは眠りに付くのであった。

遭遇（後書き）

・・・ジムなのに、強化しすぎましたね？

まあ、懲りずに強化しますが（・ω・）b

アイデアなどありましたらお願いします＞（| | ;）＜

自分は全く創造力がなくて？

コメントくれた方々、本当にありがとうございますm（| |）m

ものすごくやる気がです！！

駄文ですが、これからもよろしくお願いしますm（| |）m

あ、これからの展開なんですけど、このまま、むさい路線でいくか、厨二病学生の煩惱の展開を入れるか、迷ってます？

適当に意見などありましたら、お気軽にお願いしますm（| |）m
深夜に書いたので、テンションおかしくなってるのは勘弁してください？

荒野への出撃（前書き）

いつも通り、駄文ですが、許してください＞（――；）＜
ストーリーは、0083そのまま？ですが、ランドが体験した、星
の屑のもう1つの真実を書こうと・・・思ってます？

今回も休み前に急いで書いたものなので、内容すっからかんです？
許してください＞（――；）＜

荒野への出撃

アルビオンは未だに明確な情報を得られずに、アフリカ大陸をさまよっていた。

「ビーツ、ビーツ」

突如艦内にアラートが鳴り響く。

ランド「またかあ・・・」

一瞬艦内に緊張が走るが、すぐにその緊張は溶ける。

理由は簡単だ。左舷モビルスーツデッキ、ランドの目の前で、モンシア達がモーラと乱闘騒ぎを起こしている。
内輪もめだ。

ランド「(うわぁ・・・モーラ強っ!! 大の男を投げたっ!)」

最早当たり前と化した、乱闘を見ながら、ランドはため息を尽く。

ランド「いつまでこんなのが続くんだろうなあ」

そんなことを考えている間に乱闘は終わり、3人はどこかへ行ってしまった。

モーラ達も整備に戻っている。「ビーツ、ビーツ」

再び艦内にアラートがなり響く。

ランド「ん? コウがかえって来たみたいだ・・・うわっ!」

突如、着陸を誘導しているライトが消える。
コアファイターはそのまま座礁してしまう。

ランド「やりすぎじゃねえか！また中尉達か・・・」

ランドはそのままコウやモンシアの喧嘩を見ながら、今後に不安を感じ、盛大にため息を尽くのだった。

キース「うおわああああー」

奇声を発して走っていたキースは、バニングに当たってしまう。

バニング「どうした！？」

キース「せ、整理現象ですううう！」

キースはなおも走り続け、アナハイムのエンジニア、オービルにもぶつかる。

オービルのっていた書類が当たりに散らばる。

キースもそれを拾おうとするが、

オービル「大丈夫ですか？いってください。気持ちはいくわかりますから。」

オービルのこの一言で

キース「ご、ごめ〜ん！」

キースは再び艦内を駆ける。

キースが行くと、オービルはあわてて書類を拾い始めた。

オービルはバニングの接近に気付くと、さっさと行ってしまった。

バニング「全く・・・ん？」

バニングが一枚の書類を拾い上げる。

バニング「こ、これはっ!!！」

スコット「コアファイター発進口、開きます！」

突如、1機のコアファイターがアルビオンより発進する。

シナプス「まさか、彼がジオンのスパイだとはな・・・見失うなよ。」

シナプスが一枚の書類を手にもう命令を出す。
その書類は、アルビオンの図面であった。

スコット「艦長！オービルは残党軍にコンタクトを求めています。」

シナプス「うむ、バニング大尉、モビルスーツ隊発進だ！」

シナプスの号令にバニングが答え、指示を出す。

バニング「了解、これで双眼鏡ともおさらばです。モンシア、A小隊。貴様がリーダーだ。、B小隊。ベイトとアデル、ランドで組み待機。」

モンシア「はっ！？じゃ、じゃあ・・・」

バニング「モンシアはウラキとキースを連れていけ。」

モンシア「大尉！観光旅行じゃないんですぜ！」

バニング「これは命令だ！」

モンシア「2人も小便小僧はいらねえよ！」

モンシアがあからさまな不満の声を漏らす。
こんな編成は普通はあり得ないであろう。

キース「しよ、小便小僧！」

コウ「中尉、オムツ持参でお共します！」

コウもジョークのつもりか返事を返す。

カタパルトに上がったモンシアは、懲りずにサブカメラを使い、ニナのスカートを除こうとして・・・

シナプス「射出しろっ!!」

モンシア「うおわぁっ!」

奇怪な声を上げ、射出される。

アストン「大尉。俺の機体は？」

バニング「お前のジム・カスタムは整備中だ。だせれん。」

アストン「ちっ、つまんねえの」

アストンは舌打ちをしながらハンガーを出ていく。

ランド「あいつは勝手だなあ」

何て楽なんだろう。ランドはそう思いながら、アストンが出ていくのを見ていた。

バニング「ランド! コックピットで待機だ。急げ!」

ランド「は、はいい!」

ランドもあわてて、パワード・ジム改に乗り込む。

ランド「よし、やれるさ。この機体の性能なら、戦果4も立ててるしな・・・」

ランドは調子に乗りながら、出撃準備をするのだった。

オービル「どこも同じ用な景色ばかりか・・・ありがたい、出迎えか！」

コアファイターの先に2機のザクが出てくる。

コアファイターは進路をザクの方角に向ける。

その時だった！

ザクはマシンガンを発射し、コアファイターを撃ち落とす。

オービル「お、俺は味方だぁー！」

オービルの叫びもむなく、コアファイターは爆発する。

3機のモビルスーツが荒野を進む。

コウ「中尉！1自半です！」

コウが敵機を見つける。

モンシア「そおれ、2人ともぶっばなせ！」

モンシアの滅茶苦茶な指示が飛ぶ。

コウ「中尉、こんな距離ではあたりっこ有りませんよ！」

コウが必死に抗議するも、

モンシア「ウラキィ、これは命令だぁ！」

コウ「了解しました。」

ウラキとキースは、敵機に向かってビームを発射する。

敵機の上をビームが掠める。

敵機は、恐れおのいたのか、後ろへと下がる。

モンシア「そおれ、基地まで案内してくれるってよお！」

モンシア達は、そのまま敵機を追うのだった。

モンシア達は、なおも逃走する敵機を追っていた。

コウ「中尉！左です。」

突如モンシア達の左から、バズーカの弾頭が飛んでくる。

モンシア「くそっ！待ち伏せか！」

3機は、近くの乾いた川後に入り、応戦を始める。

バニング「くそっ、深入りし過ぎだ！」

バニングが怒りも露にし、杖で床を叩く。

シナプス「どうやら、敵はオービルを受け入れなかったようだな・・
・モビルスーツ隊発進！敵の基地は初期のオービルの逃走方向だ！」

シナプスが、バニングに指示を出す。

バニング「りよ、了解。ベイト、発進だ！」

ベイト「了解！さーって、行くかな。」

ベイトのジム・カスタム、アデルのジム・キャノン？がカタパルトに立ち、射出される。

ランドのパスワード・ジム改も、カタパルトに立つ。

ランド「ランド・シュバイツ准尉！パスワード・ジム改、行きます！」

そう言って、ランドのパスワード・ジム改も荒野へと飛び出すのだった。

荒野への出撃（後書き）

戦闘は次回に持ち越しです＞（――；）＜すいません

さて、いよいよ次回は、ビッター少将の番です。
ランドをどうぼこぼこにしましょうか・・・

今別で、地球防衛軍？を書いてるんですが、そっちの用な書き方が個人的に書きやすいんですよね？

今から変更はまずいでしょうか？

意見あれば、お願いします＞（――；）＜

熱砂の攻防（前書き）

遅れた上に短く、その上駄文ですいません？

その代わり、次回はなるべく早く投稿しますので＞（――；）＜
今回は、とにかくランドが惨敗します！！

熱砂の攻防

前方から、数機のモビルスーツが接近してくる。

アルビオンが、先制攻撃で機関銃を浴びせかけるも、軽くかわし、バズーカをアルビオンに向けて発射してくる。

ランド「こ、こいつら！や、やってやる！！」

ランドはいきり立って、パワードジム改を突出させる。

ベイト「ランド、何やってんだ！こいつらはプロだぞ！！」

ベイトが注意してくるも、既に遅く、敵の集中放火に合ってしまう。

ランド「あ、当たってたまるか！」

バーニアを吹かせ、上に飛び上がる。

最初のマシンガンはかわせても、敵は直ぐ様上に向かって射ってくる。

ランド「く、くそうっ！」

マシンガンが、次々とあたり、機体を守っているウェラブラルアーマーを剥がしていく。

アデル「ランド。慌てるなっ！敵の動きを見ろ！」

アデルの助言も耳を素通りしてしまう。

ランド「あ、あ、あ。うわあああああああー」

ウェアブラルアーマーが剥げるのを見て、ランドは恐怖の余り絶叫をあげる。

そのまま、バーニアを一杯に吹かせ、後方に着地する。

敵のドムの1機をベイトのジム・カスタムが撃破する。

ベイト「流石地元の野郎だぜ！うおわっ！」

しかし、ベイトのジム・カスタムは足をやられ倒れる。

アデル「こうも動かれてはキャノンではっ！」

アデルのキャノンも、敵の動きの速さのせいで、キャノンの特性をいかせない。

敵は好機と見たのか、そのままアルビオンめがけて直進してくる。

ランド「ハアッ、ハアッ。あ、アルビオンがやられる！・・・あのザク・・・指揮官機か！」

1度後方に下がったランドだが、敵の指揮官機らしきザクを見つけ、ザクに向かって、パワードジム改を滑らせる。

ランド「こ、こいつさえ倒せばっ！」

マシンガン捨て、ビーム・サーベルを構えてザクに向かって斬りかかる。
しかし、ザクはあっさりと横にかわし、直ぐ様マシンガンを射ってくる。

ランド「!?! やばっ」

パワードジム改を回避させようとバーニアを吹かすも、間に合わず左腕を蜂の巣にされる。

ランド「し、シールド持ってた! くそっ! 何て鈍いんだこいつ!」

パワードジム改の反応速度に、ランドはそう愚痴るが、実際はそうではない。

普段から、モビルスーツの調整等に付き合っていないので、機体を自分に合うように調整していないからだ。

ランド「ま、まだだ!」

再びザクに向かって斬りかかる。

ザクは、ヒートホークを左手に構え、ビーム・サーベルを受け止める。

ランド「このまま押し込めば!」

単純な1対1なら勝てるだろう。しかし、ランドは敵が数機いるこ

とを忘れていた。

ランド「よし、行け・・・うわっ！」

マシンガンが、パワードジム改を背後から貫く。
運良く、コックピットをそれ、爆発は防げたようだ。

後ろ手にザクが回っていたのだ。

ランドは、遂レバーから手を離してしまい、ヒートホークで右手を斬られてしまう。

ランド「ぶ、武器が！」

そのままパワードジム改は足を撃ち抜かれ、その場に倒れる。
2機のザクは、そのままパワードジム改を無視し、アルビオンに向かって前進する。

ランド「た、助かつ」

ランドが安心したのもつかの間
後ろから来ていたザクが、ランドに向かって斬りかかった。

とっさにバルカンを発射し、怯ませたザクのヒートホークは、コックピットを外し、パワードジム改の右胸を切り裂く。

ランド「よ、よし。バルカンでコックピットを狙えば」

照準をザクに向かって会わせようとするが、突如画面が消える。

ランド「えっ!？」

ヒートホークはコックピットすれすれまで切り裂き、そのままパウ
ードジム改はパワーダウンしてしまったのだ。

ザクがヒートホークを構え、斬りかかろうとしている音がする。

ランド「止めろ！止めてくれえっ！嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！・・・
死にたくないっ！！」

しかし無情にもザクをヒートホークをパウードジム改に向かって降
ろ・・・せなかった。

左からのビームにより、ザクが倒れたのだ。

ランドはコックピットから出て、何が起こったのかを見よう・・・
とはしなかった。

ランド「嫌だ・・・嫌だ・・・嫌だ・・・嫌だ・・・誰か・・・誰
か・・・誰かつ！？」

ガチガチと子供の様に、膝を抱えそのまま座っていた。

2号機を載せたHLVが発射され、アルビオンはそれを撃ち落とそ
うとメガ粒子砲を発射する。

しかし、メガ粒子砲はわずかにそれ、HLVは宇宙へと飛び出す。

2機のザクはそれを見届けたのか、ブースターを吹かし、アルビオンに肉迫する。

その内1機は、アルビオンの機銃により打ち落とされるが、残る1機。角付きの指揮官機はマシンガンでアルビオンのブリッジに合わせた。

シナプス「くっ!？」

ブリッジの誰もが、死を覚悟しただろう。

「ガキインッ」

ザクを、一筋のビームが貫く。

ニナ「ウラキ少尉！」

コウの1号機が、ビーム・ライフルで狙撃したのだ。

コウ「はあ、はあ。」

コウの放った一撃によって、戦闘は終結した。

前方、鉾山基地。

白旗を掲げ、ジオンの軍服を纏った将兵達が立っている。

コウは、動かなくなったパワードジム改を回収しようとしながら、それを見つめた。

コウ「スペースノイド。あれが・・・敵・・・」

「……?」

「……?」 「ええ、もちろん『成功』ですよ。『予定』通り、2号機は、宇宙へ上がりました。」

熱砂の攻防（後書き）

いやー、短いですね？

ランドは、とにかくフルボッコにされましたね？

これから、訓練させまくって、コウ並の腕にしようかと思っています。
ランドの過去の下りなんかも、いつか書ければ・・・と、思っています。

ランドとアストンの機体の詳細載せますね。

ランド・シュバイツ准尉

パワードジム改（宇宙様）
RGM-79

武装

ロング・ライフル

or

ジムライフル

or

フォールディングバズーカ

60mmバルカン砲×2

ビーム・サーベル×2

シールド

スペック

ジュネレーター出力 1840kw

装甲 チタンセラミック合金
ロングレンジスコープ

ガンダムにより近いデータを取る為に、パワードジム（ジム改がベース）のバックパックをより高性能にし、ジュネレーター出力を向上ビーム・サーベルを2本にした機体。
地上での改修時に、ジム・スナイパー？のロングレンジ・スコープを着けている。

ランドの要望により、反応速度が、ピーキーすぎる程になっている。

アストン・ジーニアス少尉

ジム・カスタム高機動型

武装

ジム・ライフル×2

60mmバルカン砲×2

ビーム・サーベル

スペック

ジュネレーター出力 1630kw

装甲 チタンセラミック合金

ジム・カスタムに大型のスラスターを2個取り付けけた機体。

アストンの高い操縦技術もあり、ジム・ライフルを2丁流にしてシールドをはずしている。

機体設定などは、普通の物

・・・以上ですね。

ネタバレでしたらすいません？

あと、アンケート取りたいんですが、このまま終わるか、Zまで行くか。

良ければ、意見お願いします> (| ;) <
あと、批判、意見などありましたら、気軽にお願いします。

戦線離脱（前書き）

遅れてすみません？

かぜひいてダウンしてまして＞（――；）＜

頭が痛むなか、急いで書いたので、間違えだらけなのは勘弁してください。

戦線離脱

くモビルスーツデッキ

モーラ「パワードジム改は、念入りにチェックするんだよ。本当は地上用なんだから！」

モーラは、整備員達に、指示を出し続けていた。

モーラ「・・・はあ、全く1週間で偉い進歩だねえ」

コウ「バランスおかしいや」

ニナ「ああ、勝手にさわからないで。」

コウ「僕だって計算したんだ。1号機は宇宙でもやれるさ」

どうやら、1号機の調整を『2人で』しているようだ。
やがて、ニナはコックピットを離れて行った。

ニナ「計算、間違ってるわよ」

コウ「ええ!?!」

コウは再び計算に頭を悩ませる事になってしまった。

くブリッジ

2号機を追って宇宙に上がり早1週間、サラムス級戦艦、ユイリン、ナッシュビルと合流したアルビオンだったが、アフリカでの戦闘以来、ランドは部屋に閉じ籠もる事が多くなってしまった。

その上、以前のような操縦も出来ず、偵察の任からも外され、ますます落ち込むようになっていた。

シナプス「ランド准尉の事だが・・・どうしたものか・・・」

シナプスも思案にくれていた。

バニング「艦長、ランド准尉はまだ若いのですから。むしろ、今までの戦闘でおかしくならなかったのが異常なんです。直ぐに立ち直りますよ。」

シナプス「そうだと良いがな・・・」

いままで数々の兵士を見てきたシナプスでも、どうすればいいのかはわからないのであった。

（食堂）

キース「ランド・・・大丈夫かなあ」

引き込もってしまったランドに対して、キースも心配なようだ。

コウ「そうだな・・・人参要らないよ・・・うわっ！」

相変わらず人參を沢山入れられたようだ。

席を探していると、ニナを見かけて、コウは声をかける。

コウ「ここまで計算絞れたんだ！」

ニナ「食事中よ！」

コウ「な、なら人參あげるよ。」

ニナ「そういう事じゃないわよ！」

何か機嫌を損ねたのか、ニナはそのまま怒ったままだ。

そこへ、問題児モンシアがやって来てしまった。

モンシア「ニナさん。ご無沙汰ですいませんねえ」

ニナ「ガンダムは中尉に乗ってもらった方が良いかしら・・・」

相変わらずモンシアがニナに詰め寄っていると、ニナがとんでもない事を口走ってしまった。

コウ「ニナのわからず屋が！」

そのまま、コウは走り去った。

モーラ「バカだねえ」

ニナ「べつに良いのよ。」

モーラの注意も、ニナの耳を通り抜けるだけだった。

「ピーツ、ピーツ、ピーツ」

シモン「敵戦闘艦接近、各員戦闘配置！」

モンシア「よし、いくぜ」

ベイト「旧式のゲルググなら楽なもんだ。」

発進したベイト達は、敵の機体が旧式だと知り、調子に乗っている。

アストン「この機体の初陣なんだ。逃がすかよ・・・」

アストンのジム・カスタム高機動型が敵を追い詰める。

くブリツジく

突如、通信に割り込んでくるものがあつた。

???「・・・・・・・・・・・・我々は・・・デラーズフリート！」

かつてギレン・ザビを信仰していた将校である。

（ランドの部屋）

ランド「（俺は何をやってるんだ・・・）」

戦闘配置の命令を聞きながらも、出撃出来ずにいるランド。
アフリカでの恐怖が、ランド脳裡に浮かんでいるのだ。

デラーズ「我々は・・・デラーズフリート」

突如、ランドの部屋のモニターの画面が付く。

ランド「デラーズフリート・・・？」

ランドが画面を見ていると、デラーズは淡々と語る。
ジオン再興、連邦の軍事違反、そして、2号機が映る。

ランド「!?!?あれが使われたら・・・また、沢山の人が死んでしま
う・・・それだけはっ!!・・・くそおっ!!」

ランドは、パイロットスーツに着替えると、一目散に駆け出し、モ
ビルスーツデッキへと向かうのだった。

（モビルスーツデッキ）

ランド「はあはあ、モーラ、機体は？」

モーラ「ランド！・・・今それどころじゃないの！ウラキ少尉を止めて！！」

ランドが1号機を見ると、今まさに、コウが発進する直前であった。

ニナ「コウ、無茶よっ！」

ランド「地上用で出撃！？無茶苦茶だ！！死に行くのか！？」

しかし、無情にも1号機は発進してしまう。

ニナ「コウウ・・・」

ニナは泣き崩れてしまう。

1号機は、敵と交戦し・・・ろくに動けないまま、ズタボロになってしまう。

コウ「うわああああああー！！！！」

ランド「このままじゃコウは！？・・・モーラ！ジムで出る！！」

ランドは、そういうと、パワードジム改に乗り込み、パワードジム改を動かす。。

ランド「やらないきゃ、やらないきゃ、コウが死んじゃう！！」

しかし、『死』という言葉に反応し、アフリカでの記憶がよみがえ

ってくる。

壊滅した基地で無惨な死を遂げた同僚、ザクが迫る恐怖、暗闇で死を待つだけの時間。そして、3年前の記憶・・・

ランド「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！！うわああああああああああああああああああああああああああああああー！！！」

狂ったように叫び続けるランド。

モーラ「ランド准尉！パワードジム改を止めて！」

ランドは、そのまま戦闘が終わるまで叫び続けていた。

（モビルスーツデッキリ）

大破したガンダムが、ネットに引っ掛かっている。

モーラ「一体、どうなっちまうんだろうね。」

大破したガンダムと、傷一つ無いパワードジム改を見ながら、モーラが呟く。

くブリッジく

シナプス「ガンダムは大破。ランド准尉は出撃出来ないとは……痛すぎるな。」

バニング「異常な程の怯えようです……戦線復帰は難しいでしょう。」

バニングは残念に語る。バニングの言葉通り、ランドは出撃出来ないのだった。普段は問題ないのだが、出撃しようとする、過去の恐怖がフラッシュバックし、狂乱状態になる。パイロットとしては終わりであろう。

シナプス「ランド准尉は、病院で治療に専念させよう。丁度、地球からの輸送船が来ている。一旦艦を下ろさねばならんな……」

バニング「残念です。優秀なパイロットになれる素質があったんですが……！」

ドンッ、と壁を叩くバニング。
しかし、こればかりはどうにもならないのだった。

くコウの部屋く

キース「ランド、艦を降ろされるらしいぜ……」

そう語るキースの口調は、とても重々しい。

コウ「そうか・・・」

しかし、コウは力なく答えるだけだ。

キース「お前っ！！・・・そうか・・・お前も人の事に構ってる場合じゃないんだな・・・」

先ほどの戦闘で、ガンダムを大破させてしまい、コウも落ち込んでいるのだ。

2人は沈黙する。

アストン「あの落ちこぼれ、戦線復帰は無理だってよ！ハハハハハハハハ、情けねえなあ！」

2、3人の同僚と、ランドを嘲笑うアストン

キース「お、お前なあ！！」

アストン「ああっ！！」

キース「すいません・・・」

アストンににらまれ、黙るキース

アストン「ハハハハハハハ！ざまあねえなあ！」

ますます調子にのるアストンだったが、

モンシア「貴様ああ。何笑ってんだ！！同僚があんなになって嬉しいのかあっ！？」

突然怒号が響き、アストンが振り向く。

そこには、何時ものような軽薄さを全く感じさせないモンシアがいた。

アストン「ちっ、このロートルが！？偉そうに！」

ベイト「2人とも落ち着きな、なあアデ」

ベイトが、場をなだめようとし、アデルに呼び掛けようとすると、

アデル「ふざけるなあっ」

アデルのパンチが、アストンを吹き飛ばす

アストン「ガハッ！！」

これには、周りもざわめく。

一番温厚なアデルが、感情のままに手を出したのだ。

アストン「てめえら・・・・・・・・くそがっ！」

周りから向けられた敵意で、アストンは食堂を飛び出した。

キース「モンシア中尉。ランドは・・・」

モンシア「あいつは必ず立ち直る。何せ、俺を倒した男だしな」

そう言って、モンシアは笑った。

キース「中尉・・・そうですよね、かえってくるに決まっていますよね。」

この時、キースはモンシアの、本当の素顔を知ったのだった。

（2日後）

??? 「第307補給小隊所属、アズール大尉。ランド・シュバイツ准尉をお預かりいたします。」

シナプス「よろしくお願いいたします。」

シナプスは、敬礼で答える。

ランド「・・・・・・・・・・」

ランドは、無言のまま、サラミス級巡洋艦、アルタイルへと続く通路を歩いた。

クルー全員「・・・・・・・・・・」

クルー達も、それを無言で見送ることしかできなかった。

やがて通路は離され、アルタイルは遠ざかって行った。

戦線離脱（後書き）

エーッと、こんかいは、な、何とランドが離脱!?

次回からはオリジナルエピソードに入りますよ~~~~ー（・△・）
ーブーン

まあ、口だけですがね？

すいません>（「ー;）<

頭痛いんで、この辺で失礼させていただきます。

意見、批判、中傷等ありましたら、お願いします>（「ー;）<
最後に、皆さん、風にはお気をつけください・・・（「んん）ノ
バタッ

復活（前書き）

遅れてすみません？

正月なんで、サボってました＞（――；）＜

はい・・・今回はランドが復活なんですけど・・・眠いです。かなりいそいで書いたんで、間違いなどあれば指摘お願いします？

・・・はあ、まだ後書きが（――、ん）ノ

復活

ランド「・・・ここは？」

目を覚ましたランドは、自分がいつもと違う場所にいることに気付いた。

???「ここは第307補給小隊アルタイルの医務室よ」

ランド「!？」

ランドは突如として掛かる声に驚き振り向く

???「あっ!??ごめんなさい。驚かせちゃったわね。私はルイン・パーラー。この船のオペレーターをやってるの」

優しそうな、黒髪ストレートの女性だった。

ランド「あ、俺はランド・シュバイツっています・・・何で俺は医務室に?確かアルタイルに乗った所までは覚えてるんですが・・・」

ルイン「あなた、艦に乗った途端倒れたの・・・無理が祟ったのね・・・」

度重なる出撃、狂乱するほどにまで追い詰められた精神。
当然と言えば当然だろう

ランド「そう・・・ですか」

うつむくランド

ルイン「ごめんなさい。デリカシーがないかもしれないけど、何があったの？」

ランド「う．．．モ、モビルスーツに．．．乗れなくなっただんです！．．．乗ると．．．あの時の隊長が、ドムが、ザクがあ！！！」

途端に震え叫び出すランド

ルイン「だ、大丈夫！？．．．ごめんなさい．．．」

分が悪そうに謝るルイン

ランド「．．．別にいいですよ。自業自得ですから．．．」

ランドも落ち着いたのか
普段の態度を取り戻す。

ルイン「部屋は203を使って。何もないけれど」

そう、言っ、ルインは鍵を渡してくる。

ランド「ルインさん。ありがとうございます。」

ルイン「ルインでいいです。普段のしゃべり方で構いませんよ」

ルインの心底丁寧な受け答えに、ランドも気を許してきた。

ランド「えっと・・・ルイン。ありがとう・・・？」

ルイン「ふふふ、それでいいですよ。」

ランド「（俺と対して変わらないと思うけど・・・ルインは凄いな。）」

女性は男性より大人だとよく言われるが。あれは本当なのだと確信するランドだった。

ランド「ルイン。ありがとう」

ルイン「いえいえ、構いませんよ。」

部屋の前まで送ってもらったランドは、情けないな、と思いながら部屋へと入るのだった。

ランド「特に何も無いな・・・別に良いけど・・・」

どうもテンションが上がらないランドは、そのままベッドに寝転ぶ。

当然だろう、パイロットとして終わっただけではなく、今も仲間達は戦い続けているのかもしれない。

ランド「（いや・・・俺が居たって変わらない。所詮俺は臆病な落ちこぼれなんだよ・・・）」

子供のようにふてくされながら、ランドは眠りについたのだった。

久しぶりに夢を見た。3年前の「父」の夢を・・・

「アルタイルブリッジ」

艦長「アズール大尉、ランド准尉は大丈夫かね？」

艦長と思われる男性が、壁にもたれ掛かったアズールに声を掛けている。

アズール「今のところは落ち着いていますね。普段は特に問題はな
いようです。」

艦長「全く、あんなに若い兵士を使い潰すとは・・・連邦も腐敗し
たな・・・」

艦長は、ため息をつきながら、心底残念そうに語った。

アズール「そのとおりですね。連邦は・・・今こそジャミト」

ルイン「機影確認、距離2000！・・・ゲルググタイプ3！？こ
れは・・・海兵隊仕様のMマリーネです！！」

アズールが話している途中、ルインが敵機接近の警報を告げた。

艦長「2000だと！？・・・岩礁に隠れていたか！！第1戦闘配
備！アズール大尉、第1、第2小队出撃だ！！」

艦長の命を受け、アズールはモビルスーツデッキへと向かった。

ルイン「(ランド・・・大丈夫かしら・・・?)」

ルインの心配事もつきないのであった。

「???」

3年前、ホンコンシティをジオン残党が襲撃した。

防衛のモビルスーツ隊はほとんど相討ちで撃破され、しないには、3機のザクが闊歩していた。

少年「父さん！行っちゃ駄目だ！」

ああ、これは夢だ。

ランドはそう確信した。

自分の目の前には3年前の自分と、燃え盛るホンコンの町がある。そして、3年前のランドの前には、父の姿が見える。

軍のモビルスーツパイロットでめったに家にかえってこなかった父。ランドははつきり行って父が嫌いだった。

・・・この時迄は

ランド父「・・・・・・・・・・」

この時は無言だったな

ランド「モビルスーツ隊は全滅したんだ！今さら1機で行ったって無駄だよ！」

はは、確かに無謀だな。

いくら嫌いでも、実の父に死んでほしくはない。

ランド父「ランド・・・」

ランド「父さん・・・」

このあとの事は覚えてないんだ。

泣きじゃくって父を見送った。父が何かを話していたが、それどころではなかった。・・・これが父を見た最後だった。

3機のザクと刺し違えて、父が乗ったジムは爆発した。

空っぽの棺、何も思えなかった。父が死んだ実感が沸かなかった。

その後、なんとなく過ごし士官学校を卒業、軍隊へ入った。

今思えば、父をおっていた。父はいつも泣かず、冷静で・・・そして強かった。

俺はそんな父に憧れていたのかもしれない。

俺はなんて情けないんだ！覚悟もなく！逃げてばかりの臆病者だ！！

ランド父「ランド・・・私は強いかな？」

ああ、。むちゃくちゃ強いよ。俺とは比べ物にならないぐらいな。

俺は泣きじゃくって・・・まで！？こんな話聞いたことが・・・

ランド父「私はな、すごく弱い。はっきり行って逃げ出したい。だ
がな・・・」

俺はこんなの知らないぞ！？

記憶の中の父は震えながら語る。

ランド父「今さら・・・言い訳をしようと言う訳じゃない。私は怖いんだ。死ぬ事よりも、お前を守れないことのほうが・・・」

あ、あ、あ

始めて聞く、父の最後の言葉

ランド父「大事な人を守れない・・・それだけは絶対に後悔したくないんだ。ランド、守りたい者ができると、人は強くなれる・・・お前もそういう人を見つけれ・・・ああ、それと臆病なのは、全く恥じる事じゃない。気にするな・・・」

父はこちらを振り向き・・・笑った。

・・・そして離れていく

俺は・・・俺は・・・俺は!!

ランド「父さあん!!」

ガバツつと言う音が響くほどに勢いよく飛び起きる。

艦内には、警報が鳴り響いていた。

ランド「後悔だけはしたくない・・・だから、俺に出来る事をするんだ!!」

父の背中を追うのはもうやめだ、これから先は自分で決める!

ランドは勢いよく走りだし、モビルスーツデッキへと向かうのだった。

連邦兵士1「くるなくなるな・・・くるなああああ・・・」

連邦兵士2「嫌だ！死にたくない！助けっ」

連邦兵士3「うわっ、うわっ、うわあああああああ」

3機のジム改が、爆炎と共に消える。

アズール「ロン！キブリー！ジャン！くそっ！」

アズールも善戦しているが、こちらはジム改1機。敵はゲルググM3機

アズール「があああああああ」

ジム改のコックピット付近にマシンガンが命中に、被弾する。

アズール「くっ、こちら・・・アズール、帰還する・・・」

何とか敵の弾をよけ、アルタイルのデッキへと着艦する。

今は対空砲火でしのいでいるが、いつまで持つかはわからない。

アズール「うう、くそっ・・・すまない。」

整備員「大尉のせいじゃありません・・・」

整備員がアズールを引き出し、治療しながらフォローするが、辺りには、既に死のムードが漂っていた。

整備員「死にたくねえ・・・死にたくねえっ!!」

対空砲火が破られた時が、自らの死につながるのだ。

ルイン「私が出ます。予備のジムがありますよね?」

ルインが、整備員に声を掛けた。

整備員「ルイン中尉!? 無茶です。死に行くんですか!?!」

ルイン「大丈夫です。士官学校で訓練はしていますから。」

アズール「止める・・・んだ、やつらはプロだ、無駄死にする必要は・・・」

たしかに無茶だ。

敵は1年戦争を生き抜いたベテラン、操縦を知っているだけでは叶うわけがない。

ルイン「しかしっ!!」

ランド「俺が行く!!」

突如、デッキに違う声が響いた。

ルイン「ランド!? しかし貴方は!!」

ランド「もう大丈夫だ。」

ランドは、ルインの制止を振り切り、ジム改へと向かう。

アズール「ランド・・・やれるのか？」

ランド「アズール大尉・・・やれま・・・いえ、やります!!」

ランドを知っている人なら、目を疑うだろう。

今のランドには、以前のような迷いがなかったからだ。

整備員「パイロットスーツをどうぞ」

ランド「ああ、助かる。」

口調まで変わったランドは、そのままパイロットスーツに袖を通す。

そのままジム改に乗り込み、起動させる。

ランド「ルイン!!」

ルイン「はいっ!？」

突然の呼び掛けに、驚きながら対応するルイン。

ランド「俺、気付いたんだ。大事な人を守れなくて、後悔はしたくない。俺に出来る事があるんなら、全力でそれをしようって」

ルイン「だ、大事な!？」

突然の告白にテンパるルイン・・・ランドにその気はないから質が悪い。

ジム改をカタパルトにたたせる。

ランド「父さん・・・やっとわかった。おれも父さんと同じだ・・・
守れなくて後悔だけはしたくない！！ランド・シュバイツ、行きま
す！！」

ジム改は、カタパルトから射出されると、勢い良く宇宙へと飛び出
した・・・

復活（後書き）

ランド復活早っ！

いろいろ省いてすいません＞（――；）＜
キャラクターの細かい設定などは、区切りよくなったらのせますので。

オリジナルルートと、アルビオンルート。ランドはどちらを進ませたいか、良ければ意見お願いします＞（――；）＜

あと、終わったあとのZ編についてなんですが、

？、特徴無しのユウト

？、ヘタレのランド

？、思いきって新キャラ！

主人公どれがいいでしょうか？

意見等ありましたら、気にせずをお願いします＞（――；）＜

ランド、宇宙へ（前書き）

えーっと・・・眠いんでちょっと省かせて下さい（――；）＜
細かい設定は、アルビオンへ戻る頃に書きます。

今回は学校が始まるとなかなかかけなくなるので、早めに書きました。

相変わらずの駄文ですが、よろしくお願いします（――；）＜

ランド、宇宙へ

勢い良く飛び出したジム改。

そこまでは良かったのだが、敵に見つかり、集中砲火を浴びてしまう。

慣れない宇宙戦、思うように動く事ができず、あっという間に防戦一方になってしまう。

何とか、周りを飛びながらマシンガン撃ってくる、ゲルググMの動きについて行く。

ジム改のスラスターを吹かせ、上手くゲルググMの後ろに着く。

サイトを会わせようとするが、敵も捕らわれまいと必死に動き回るが、

ランド「よおし・・・頂っ」

トリガーを引く直前だった。目の前にもう1機のゲルググMが現れる。

ランド「なっ!？」

ランドは、目の前の敵に集中するあまり、1対3だという事を忘れかけていた。

とっさに緊急回避するも、先程までいた場所には、既にマシンガンの弾が到達していた。

ランド「長引けばアルタイルが狙われる・・・どうすれば・・・」

そう思いつつも、ゲルググMからよけるだけで精一杯だ。
3機は、鮮やかな連携プレーでランドを確実に追い詰める。

ランド「こいつら、なんて連携・・・待てよ？」

このまま消耗戦になれば、確実にこちらがやられる。
そんな時、ランドはある事に気が付いた。

ランド「俺の読みが正しければ・・・」

ランドはあろうことか、ジム改を動かし、あえて敵の連携プレーに
嵌まりに行くのだった。

くアルタイルブリッジく

何人かのクルーが、ランドの戦いぶりを固唾を飲んで見守っている
なか、ランドは突如無謀とも言える行動をとった。

アズール「馬鹿な！わざわざ敵の策に嵌まるなど！やられていない
だけでも奇跡な物を！！」

傷をおったアズールもそのようすを見ていた。

艦長「くそっ。やはり彼は狂乱しているのか！？だからあえて死に
に行き・・・」

艦長もランドのあまりにも無謀過ぎる行動に苛立っている。

連邦士官1「くそっ！こんな奴を出すんじゃない無かったんだ！」

連邦士官2「何であんな奴を・・・誰が出したんだ！」

ブリッジは、混乱に包まれ、あたりではランドの批判が飛び交う。

ルイン「違うっ！！」

そんな中、ルインがあたりに響く大声で叫んだ！

ルイン「ランドはそんな気持ちで行ったんじゃない！！私たちを守るために行ったんです！」

連邦士官1「し、しかしあの戦い方は無謀過ぎるのでは・・・？」

いつもの大人しさを全く感じさせないルインに士官は驚き、自信無さげに反論する。

ルイン「なら、貴方は出れますか？この絶望的な状況の中で」

連邦士官「うっ！？そ、それは・・・」

見も蓋もない言葉をいわれ、連邦士官は黙る。

ルイン「ランドは、臆病・・・いや、優しすぎるんです。けれど、私たちを守るために戦ってるんですよ！！私たちが信じてあげなくて、一体どうするんですかっ！！」

とても澄みとおりの、そして決意を込めた言葉がブリッジに響く。

連邦士官2「そうだ・・・俺たちが信じてやらなくて、誰があいつ信じるんだ！」

ルインの言葉に反応して、ブリッジは沸き立つ。

来て間もないのに、「信頼」という大きな物を得たランド。これは何かの才能なのかも知れない。

沸き立つブリッジで、ルインは一言小さく呟いた。

ルイン「ランド・・・生きてかえって来てください・・・」

その声は、とても震えていた。

ジム改が、飛び込んで来たのをいいことに、3機のゲルググMは、ジム改に連携攻撃をしかけ、四方からマシンガンを浴びせかける。

ランド「ここで当たったら!!」

ジム改を必死に動かし、マシンガンに当たるまいと避け続ける。

しかし、完全には避けきれず、機体のいくつかの部位が悲鳴をあげる。

ランド「くそっ！やるしかないか・・・今だぁ!!」

攻撃に当たるのが覚悟で、ランドはジム改を、避けさせるのではなく、後ろへ「向かせた」

ランド「・・・頂き」

そう呟いたランドは特に狙うこともなく、ありったけマシンガンをぶっぱなした。

その射線上には・・・いままさにマシンガンを撃とうとしているゲルググM。

マシンガンはそのゲルググMを貫いた。

2機のゲルググMは驚いたのか、動きを止める。

ランド「見事な連携だ。けど、必ず1機が後ろ「死角」に来る。それが・・・弱点だ！」

マシンガンを捨て、ジム改はビーム・サーベルを構え、ゲルググMへと肉薄する。

咄嗟にビーム・サーベルを抜こうとしたゲルググMだったが、一歩及ばずビーム・サーベルの餌食になる。

残ったゲルググMは、必死にマシンガンを撃ち、抵抗してくる。おそらく僚機が撃破されたことに動揺しているのだろう。

ランド「・・・」

ランドは無言でそれを避けながら、ジム改を接近させる。

逃げようと背を向けたゲルググMを、ビーム・サーベルが容赦なく切り裂いた。

ランド「・・・父さん。俺、父さんを越えれたかな・・・」

ランドはふと亡き父に向かって問いかけたのだった。

ガション！

と、言う音を立て、ジム改がアルタイルのデッキへと降りる。

ジム改を固定させると、コックピットからランドが降りてくる。

あたりにはクルーが集結しており、ランドに向かって歓声を送られている。

ランド「な、何かむず痒いな」

ランドが頬を搔きながら、照れ臭そうに笑っていると。

ルイン「ランドッ！！」

ルインが、『抱きついてきた』

ランド「うわあっ！！・・・ル、ルイン！？」

未だに女性と手を繋いだこともないランドは、突然の出来事にテンパる。

ルイン「良かった・・・無事で、本当に良かった」

ルインは泣きながらランドの胸にヘルメットを押し付ける。

ランド「あ、あ、あ、あ、あ」

しかしランドはそれどころでは無かった。

突然の出来事、それとノーマルスーツ越しでも、女性の『ソレ』は感じられる。

10人に聞けば、10人が「デカイツ!!」と答えるほどの『ソレ』を押し付けられ、ランドは気が気では無かったのだ。

クルー一同『『死ねえええー』』

クルーの嫉妬は爆発した。

ランドは生還したばかりなのに、再び死にかけるのだった。

くアルタイルブリッジく

艦長「うむ、なら君は戦線に復帰できるのだね。」

ランド「はい。自分はモビルスーツに再び乗れるようになりました。」

く

ランドは艦長の問いかけに、そう答える。

艦長「そうか、良かったな。良ければ、アルビオンへ戻る前に、1つ作戦に参加してもらえないだろうか。」

ランド「作戦……ですか？」

艦長「そうだ。この近くで略奪行為を続けている、ジオン海兵隊が居てな。本艦はその作戦に補給艦として参加することになったのだ」

要するに、先程戦闘した奴らがこの近辺で問題を起こしているので、殲滅しろ、という、基本的な残党狩りだ。

ランド「・・・・・・・・・・」

ランドは少し迷って、

ランド「・・・・参加します!!」

そう答えた。

その目は、今までとはまるで違う・・・・そう、決意に満ちていた。

〱ランドの部屋〱

飾り気のない部屋でベッドに寝転び、ランドは今日の事を振り返っていた。

ランド「参加するって言っちゃったけど・・・・良かったのかなあ」

突然弱気になる。ランドは基本『ヘタレ』なのだ。

ランド「けど、何かあったとき、俺が戦えば誰かが助かる。そうだ

よな。」

基本的に補給艦は戦闘をしないからだ。

ランドはそう自分に言い聞かせると、眠りに付くのだった・・・

その日、ランドは再び父の夢を見た。それは、幼い頃の父と遊んだ、父の数少ない記憶の夢だった・・・

ランド、宇宙へ（後書き）

はい。次回もオリジナルエピソードです~~~~ー（・△・）ー
ブーン

いろんな方から、ソロモンまではオリジナルで行けば？
という意見を頂きましたので＞（――；）＜

まあ、全くおもしろくもなく、浅い話になると思いますが・・・？
ランドも復活（早すぎましたね？）、次の戦闘では活躍します！

ランドのステータス（Gジェネワールド等から参照）

初期↓現在（ソロモン戦以前）

射撃..	14↓20
格闘..	13↓18
反応..	15↓22
守備..	12↓17
覚醒..	?↓?

スキル

?
?
?

※後ほど調べてのせます？

・・・あれ？軽くキース越えましたね？
このペースで行くとZではどうなるのやら・・・

まあ、ランドはかなり負けさせて成長させますので、ご安心？下さい。

意見などありましたら、作者の心は気になさらずに、お気軽に願います＞（――；）＜

a s t e r o i d w a r (前書き)

遅れてすいません> (――;) <来週テストがありまして?
これから当分更新できません?

今回は、小惑星帯での戦いです。

相変わらずの駄文ですが、宜しくお願いします> (――;) <

asteroid war

「小惑星帯の近く」

サラミス級補給艦アストラルは、サラミス級巡洋艦8、マゼラン級1の艦隊の後ろを追走していた。

艦長「まもなく小惑星帯に差し掛かる。各員、第2戦闘配置。パイロットは指示があるまで各機体で待機」

アズール「了解しました。ローレン、ヨハン、ランド行くぞ」

3人「了解です。」

アズールの指示に従い、3人はハンガーへと向かう。

ローレンとヨハンは、アズールの部下だ。前回の戦闘の際は、物資受け取りで艦を離れていたため、難を逃れている。

ローレン「全く、たかが残党狩りに、艦隊を動員するなんて、上の連中は臆病だな」

ヨハン「そのとおりだね。その上、こんな新米まで使うなんてね・・・」

ヨハンは笑いながら、ランドを見てくる。

この2人は、前回のランドの活躍を聞いていないのだ。

ランド「（くそ！ 実戦を知らない素人のくせに・・・上官じゃなけ

や文句行ってるのに」

温室育ちのお坊っちゃま達は、ランドのような例外を除いて、実戦経験がない。これは、この時代の連邦兵士によくあることだ。

その上、この2人は少尉だ。未だ官僚制が色濃く残る連邦軍には、家柄が良いと言うだけで、士官になれてしまう。腐敗してしまうのは、誰の目にも明らかだった。

（ハンガー）

ランド「・・・もうちょっと反応速度早くしてもらえますか？」

整備士「出来るけど・・・こんなの扱えるの？」

ランド「何とか・・・反応が遅いよりは、早すぎる方がいいですね」

ランドは、出撃にそなえ、自らが乗るジム改の調整をしていた。

整備主任「あの准尉さん。やけに真面目だな。今時珍しいタイプだ。」

何気に真面目なランドを、整備主任は感心しながら見ていた。

整備士「確かに、他の2人はともに調整してませんね。生き残れるんですかね・・・そういえば主任は戦争を経験してたんですよ

ね？」

他の2人は、コックピットでくつろいでいる。

整備主任「ああ、よく似た目をしたパイロットを見た。鉄の棺桶に乗って、生き残るために必死になってな。」

整備主任は、どこか懐かしそうに語る。

整備士「へえ……とと、俺もやることあるんですけど。」

整備士は用事を思い出したのか、いそいそと作業に戻る。

整備主任「自文の命を預けるんだ……しっかり整備しねえとな」

そう言って、主任も整備に戻るのだった。

（30分後）

未だ緊張に包まれていたブリッジに、突如アラートが鳴り響く。

ルイン「ミノフスキー粒子濃度急上昇！」

艦長「何っ！位置は！？」

ルイン「ええと……駄目です。レーダー使用不可！」

艦長「ちっ！各艦に通達。モビルスーツ発進急がせろ！」

ルイン「了解です。」

ルインは、各艦に通信で呼び掛ける。

艦隊は陣形をとりながら、モビルスーツを発進させる。

先頭にサラミス級2、ジム改6。

右舷にサラミス級2、ジム改6。

左舷に、サラミス級2、ジム改6

中央にマゼラン級1、左右をサラミス級2が警戒し、ジム改9が回
りを取り囲む少し下がって、アルタイルが待機

。

モビルスーツは計27機。大編隊であった。

しかし、ミノフスキー粒子濃度急上昇にも関わらず、敵の姿は見えない。

艦隊指令「ええい。早く残党どもを見つけんか！！艦隊前進！敵に
我々の戦力を見せつけてやる！」

オペレーター「し、しかし！？」

艦隊指令「うるさい！艦隊進め！」

太りきった艦隊指令は、オペレーターの制止を無視し、艦隊をさらに小惑星帯の奥へと進ませた。

無謀過ぎるにもほどがある命令だった。

くハンガーく

ランド「早く出してください！」

整備士「待て、まだ出撃命令は出ていない！」

ランドは、整備士に早く出すように詰め寄っていた。

ランド「くそっ！・・・あの海兵隊なら、確実にこの機会を狙ってくる・・・急がなきゃ艦隊が！！」

なかなか降らない出撃命令にランドはイライラしていた。

く10分後く

「チュドン」

「ガガガガガ」

「ジュッ」

数多の火線が、艦隊囲うように襲う。艦隊は敵に包囲されている。

ランドの心配は、見事に当たってしまったのだ。

ビーム、マシンガン、バズーカ、様々な兵器が艦隊を破壊する。

艦隊指令「な、何事だあ!?!」

オペレーター「敵の攻撃です!!! 前方、サラミス級全滅! 右舷左舷にも被害!... 前方からゲルググ1!!!」

艦隊指令「な、なんだとお!?!」

まさに電光石火の奇襲。艦隊は総崩れとなり...

艦隊指令「ば、ばかなああああ...」

『紫と金』色をしたゲルググMカスタムが、旗艦のマゼラン級のブリッジを撃ち抜く。

マゼラン級は炎と共に消えた。

くアルタイルブリッジく

ルイン「艦隊は総崩れです!!! 敵は... ゲルググ9機?... たった9機です!!!!」

艦長「これが海兵隊か... モビルスーツ隊発進!!!」

艦長の号令と共にモビルスーツ隊が順次発進していく。

ランド「言わんこっちゃない・・・ランド・シュバイツ行きます！」

最後にランドのジム改が、カタパルトから飛び立つ。

ローレン「いた！頂きだぜ！」

アズール「ローレン！離れるな！」

アズールの命令を無視し、ローレンは飛び出す。

ローレン「旧式のゲルググがあ！」

ローレンのジム改はマシンガンでゲルググに向けて発射する。

しかし、ゲルググMはいとも簡単によけ、よけざまに、速射砲で牽制射撃をくわえてくる。その牽制射撃を背に、1機のゲルググMがビーム・サーベルを構えながら接近してくる。

ローレン「嘘だろ！ゲルググがこんなに早いなんてえ！」

ローレンのジム改が切られそうになった瞬間、ゲルググMは突如下がる。

ゲルググMがいた場所には、すでにマシンガンの弾が到達していた。

ランド「ローレン少尉！無事ですか？」

ローレン「ら、ランド！てめえ、手を出」

ランド「そっちが手を動かしてください！」

ランドのジム改がマシンガンを発射し、ローレンに近づいて来ていたゲルググMを追いつく。

ヨハン「ローレン。今は争ってる場合じゃ無さそうだよ!」

ヨハンも牽制射を加えてよけるだけで精一杯なようだ。

ローレン「ちっ!しょうがねえ!」

ローレンのジム改は一旦さがり、他の3機と合流する。
敵は3機編成のゲルググMが2個小隊だ。

ランド「ヨハン少尉!援護してください。」

すぐ横にいたヨハンに声を掛け、ランドはジム改を小隊に向かわせた。

ヨハン「ランド!?わかったよ」

始めは止めようとしていたヨハンだが、諦めたのか突っ込むジム改に向かって援護射撃をくわえる。

ランド「当たるなあ・・・当たるなあ・・・当たれ!」

ゲルググMのマシンガン进行を何とか避け、ゲルググMの至近距離で、マシンガンマガジン1つ分撃ち尽くす。

至近距離で避けきれなかったのか、2機に命中。爆発する。

ランド「よし!」

その間にも、アズールが1機を切り裂き、マシンガンの集中砲火を浴びせまくったローレンとヨハンが1機、計4機を撃墜する。

不利だと思ったのか、途端にゲルググMは後退しようとするが、

ランド「行かせるか!」

ランドのジム改が回り込み、撤退を妨害する。

そのまま撃破し終わりかと思われたが、ランド達は1つ大事な事を忘れていた。

敵は「9」機いたということを・・・

「ヒュッ」

と、上からきた一筋のビームが、アズールのジム改を掠める。

アズール「なんだっ!？」

ヨハン「アズール大尉!」

ヨハンのジム改が、アズールのジム改に近付こうとする。

ランド「行くな!」

ランドのジム改が、ヨハンのジム改の腕を掴み引き寄せると、そこに再びビームが走る。

ヨハン「うわっ!?! 一体なんだ!?!」

3人が顔を向けた先には「紫と金」色をしたゲルググMカスタムが傍らにゲルググMを2機従え接近してきていた。

ランド「紫と金色のゲルググ・・・まさかっ!？」

先日、アルビオンのモビルスーツ隊が、手玉にとられた機体だ。

ランド「全機!フォーメーションアロー!まともにやりあって勝てる敵じゃあない!!」

ローレン「わ、わかった。」

ヨハン「あ、ああ」

ランドの迫力に気押されたのか、2人は素直に従い、ランドの後ろに尽く。

アズール「何を言っている、各機散開!俺は隊長機をやる。」

アズールはそう言って、Mカスタムへと向かっていく。

アズール「墜ちろ!!」

ビーム・サーベルを構え、Mカスタムに斬りかかる。

ランド「・・・駄目だ!踏み込みが浅い!」

ジム改のビーム・サーベルは空を斬る。

Mカスタムが直前に後ろに下がったのだ。

アズール「何い!?!・・・まだだ」

ビーム・サーベルを構え直し、再びMカスタムに近づく。

アズール「頂だ!!」

ビーム・サーベルが到達しそうになった瞬間。

「ドドドド」

Mカスタムの左腕の速射砲が、ジム改を襲った。

アズール「がああああああ・・・」

至近距離でもろにそれを食らえば、ジムの装甲では持ちはしない。
ジム改は、蜂の巣になり、爆発した。

ランド「大尉!? くそっ!!」

ヨハン「う、嘘だろ! 大尉が!？」

ローレン「大尉無しでどうするんだよ!？」

2人は懇願するが、その間にも敵は迫ってくる。

ランド「・・・隊長機さえ叩けば勝てる。捨て身で俺が突っ込みます! 援護してください!!」

ランドはそういうと、隊長機に向けて一直線に突っ込む!!

ローレン「お、おい!・・・やりやあ良いんだろうが!」

ヨハン「くそっ・・・しょうがない!」

2人もランドに懸けたのか、ありったけの弾を撃ちまくり、援護射撃を加える。

ランド「弾をよくみる・・・よくみ・・・ああ、無理だあ！こんなったら勘に懸ける！！」

無茶苦茶な選択をしながら、ジム改は、大量のマシンガンを避け続ける。

右へ左へ、上へ下へ、そのさまは、まさにバツタであつた。

ランド「ぐ、ぐおおお」

ピーキーすぎる反応速度、無茶苦茶な加速により来る強烈なG。ランドはそんな状況の中、ジム改を必死に隊長機へと向かわせる。

ランド「だらっしゃあああああ！！」

大声を出しているせいで、最早キャラが違っている。

何とか弾幕を交わし続け、Mカスタムの近くまで接近したランドは、ビーム・サーベルを構え、斬りかかる。

Mカスタムもビーム・サーベルを構え、それを受ける。
激しい干渉刃がでる。

ランド「うおおおお！！」

勝負は敵のゲルググMが、隊長機に弾が当たらない所を撃つまで、あまり時間はない。

必死にビーム・サーベルを押し込む。

ランド「このままじゃ、らちが・・・一か八かだ！」

機体を後ろに下がらせる。

Mカスタムはバランスを崩す。だが、ビーム・サーベルはジム改の胴体に達する。

「バチバチバチ」

コックピット内の部品があちこちへ飛び交う
それはランドの体中にも突き刺さる。

ランド「があっ!!・・・い、いまだあああああ」

体制を崩したMカスタムに、ビーム・サーベルをふりおろす。

「ズバッ」

という音と共に、Mカスタムの右腕が斬られる。
しかし、Mカスタムはまだ動いている。

ランド「くそっ!ま、まだか・・・・・・」

ランドは無言でジム改を動かし続ける。
しかし、無情にもマシンガンがランドのジム改を襲う。

ランド「・・・・・・」

ただ、ひたすらに避け続けるジム改。
しかし、ゲルググMのマシンガンは遂にジム改を捉え、ランドには
死が・・・訪れなかった。

「パーン」

眩しい光の信号弾が上がり、敵は撤退していく。

しかし、全く喜べる事ではない。

艦隊は壊滅、撃破した敵はわずかゲルググ4機、あまりにも大きすぎる損失だった。

ルイン「上層部が真面目に考えていればっ！」

散って行った戦友・・・腐敗しきった連邦軍に対して、ルインも怒る。

艦長「アズール大尉の事は残念だった・・・だが、まだやることもある。生存者の回収、モビルスーツ隊帰還急がせろ！敵が来る前に、この宙域を離脱する。」

艦長の命でアルタイルは反転する。

ルイン「そうだね、まだやることが・・・ローレン機、ヨハン機、着艦しました。」

艦長「うん？ランド准尉はどうした。」

ルイン「問題・・・ありません。こちらに向かって来ています。」

ランド「はあ、はあ、生暖かい物・・・血か・・・」

ランドは薄れ行く意識の中、アルタイルへと帰還すべく、必死で操

縦管を握っていた。

ルイン「ランド准尉。ぶじですよね？」

ランド「あ、ああ」

相当なやせ我慢をし、そう答える。

ルイン「良かった。早く帰ってきて下さいね。」

ランド「・・・グフツ、か、帰れるか、わか・・・・・・・・・・
・ご、めん」

相当無理をしていたのだろう。吐血をし、その言葉を最後に意識を失い、ジム改は宇宙に漂う。

ルイン「ランド准尉！？どうしたんですか！？准尉！ランドオー！
！」

ランドは答えない。ルインの叫びだけが、虚しく宇宙に響くのだった。

asteroid war (後書き)

あれ？主人公死亡（。D。）

ちゃんと生きてます？

本編では、バニング大尉の下りがあるので、ソロモン戦まで、このままオリジナルルートで行かせたいと思います＞（――；）＜
図々しいですが、キャラ数が少ない気がするんで、良ければアイデアもらえないでしょうか？

名前、容姿、性格等

少しでもいいので、あればお願いします＞（――；）＜

次回予告

ランド達を追い詰める海兵隊。

ゲルググがアルタイルに迫る時、ランドは………（この内容は一部変更になるかもしれません。）

あと、意見などありましたら、お気軽にお願いします＞（――；）＜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4459y/>

機動戦士ガンダム0083—もう一つの星の屑—

2012年1月13日01時50分発行